
親友な僕ら

えるもんて

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

親友な僕ら

【Nコード】

N8322P

【作者名】

えるもんで

【あらすじ】

物心が付いた時には両親がいなかった、小宮山明人。

小さい頃に、そんな絶望の生活から救ったのが、一つ年上の篠原孝助。

彼が小学校で創設した部活動、傘部。ただ困っている人を助ける部。

明人はそんな意味も分からない部活動に、人数合わせのために強制的に加入させられてしまうのだった。

傘部には、孝助の弟である翔平をはじめ、不器用でなかなか心を開いてくれない、松坂愛理。馬鹿の上に天然が混ざってしまっている、合田一輝。賑やかな、そうでないようなメンバーが揃っていた。

そんな彼らと共に、明人は訳も分からないまま、困っている人が助けられていった。

時は高校2年生の夏。

いきなり孝助がある提案を出すのだった

再結成、傘部

「なあなあ、明人明人」

「なんだよ」

漢字の小テスト中に小声で話しかけてくる、違反行為をしている

コレの名前は合田コウタカスキ一輝。

クラス一、いや、下手すれば学年一の頭の悪さの持ち主だ。

「『みさお』って、誰だ？」

「それは人の名前じゃなくて、『操』って漢字だよ…！」

「ほうほう。おめえ、やつぱすげえな」

何か、一輝に褒められてもまったく嬉しくないのは何でだろう。

一輝は質問が終わると、また紙と睨めっこを始めた。

一輝のがたいの良さは周囲を圧倒出来るが、勉強中の一輝からはまったくもって圧倒出来るほどの威圧感がない。

僕の学校ではブレザー使用の学校で、一輝も着ている。だが、ボタンは全開でシャツは出たまま、という風紀委員の格好の狙い目となっている。

しかし一輝は、ブレザーの下に着るシャツのボタンは全て留めている。

第一ボタンは開けて良い、という規則があるにも関わらず。

一体何をしたいのか分からない。

「なあなあ、明人明人」

また小声で話しかけてきた。

僕は静かに返事をした。

「『おかん』って誰のおかんだよ」

「『オカン』じゃなくて『悪寒』ね」

「ほうほう。おめえ、やつぱすげえな」

本気で感心してくる一輝は、馬鹿そのものに見えた。

これが馬鹿なのかと。

「明人！昼休みだぜ！」

小テストから開放され、一時間弱ある昼休みに突入した。

一輝からその声を掛けられ、食堂に行く準備をしていると。

「翔平！お前も来るだろ？」

「ああ」

翔平と呼ばれたこの男。フルネームは篠原翔平^{しのはらしゅうへい}。

一輝と同じようなでかさがあり、この二人と一緒にいると、なんだかとても心強くなる。

しかし翔平は一輝とは違い成績優秀で、女子層からの人気も少なからずあるらしい。

一見クールで気むずかしそうな感じが出ているが、意外とそういうわけがなく、優しい。まあ、僕らに接している所しか見たこと無いんだけど。

それくらい翔平とは一緒にいる。頼れる友達だ。

「あれ？孝助はまだかよ」

食堂に着くと、生徒が大量に群がっており、我が我がと定食を争っていた。

ちなみにここの食堂の定食は、なかなか美味しい。

この前初めて食べてみたけど、こんなものが学校で出て良いのかというくらいに美味しさだ。それに、お手頃な値段だった。

生徒が奪い合うのも分かる。

そんな中、空いている席が4つあった。この大勢いる中、ちょうど4つ空いていた。そこへ一輝が向かう。

「知らない」

その4つの席を確保していたのは、一人の女子である。

彼女の名前は松坂愛理^{まつざかあいり}。

小学生の頃から、なかなか人と打ち解けない性格の持ち主で、僕を始めたとして、一輝や翔平以外には心を開かない。

なんかそれはそれで何かしらの優越感は感じるのだが、将来への不安はある。愛理がこのまま一人でやっていけるのか。たまに深く考えることがある。

愛理は不器用ではあるが、見た目は可愛いためか、女子、男子共に優しく接してくれる人が多い。(まあデカイ二人といえるから近づいてこないけど)

「知らないってだな…」

一輝がイスを引き、座ろうとしたときだった。

「っ！！？いつてえええ！！なんかケツに刺さった！痛い！グサッてきましたグサッて！」

一輝はまた飛んでイスから跳ね退いた。お尻を押さえながら。

「危ないぞ」

「遅えよ！！」

愛理の遅すぎる警告にキレる一輝。

よく見るとそのイスには、大工が使うような7cmくらいあるような釘がセツトされていた。どんな木でも貫通しそうな先端を上に向けながら。

そりゃあ他の生徒が座らないわけだ。というか座れないわけだ。

翔平は何も言わず釘を抜いてから座っているけど。

僕もそれを見て、釘を抜いてから座ることにした。

「孝助遅いね」

「まあ、孝助の事だから、また何か企んでいるんだろう」

翔平は静かに弁当箱を開くと、手を合わせた。

「まあ、孝助の事だから、また何か企んでいるんだろうな」

愛理も手を合わせると、弁当に手を付けていった。

二人とも、学校の食堂なのに堂々と、家で作ってきたであろう弁当を食べるところがすごい。

この二人には『食堂では学食しか食べてはいけない』という暗黙の了解は通用しないようだった。

「おいおい何だ二人して。俺がそんなに何か企んでいそうか？んま

「あ企んではいるけどな」

「僕もご飯を食べようかとした時に、孝助は来た。」

篠原孝助しのはらこうすけ。翔平の兄で、今年で高校3年生である。

昔からリーダーシップを発揮しては、この纏まりのない僕たちを纏め上げる、ある種の天才だった。

遊びの発想もすごく、誰もが気を引く遊びを提案する、遊びの天才でもあった。

孝助は何でも出来るスターのようなもので、僕の憧れる人だ。

運動ができ、勉強もでき、そして女子から大人気。

本当に少女漫画で出てくる理想型とも言える。愛理からも心を開かれている。

「孝助っ！」

「おう、明人」

「何企んでいるんだ？孝助……」

怪しい目で孝助の見つめる一輝。まあ、確かに孝助の考える事だから怪しいけど。

「それはだな……」

『んんっ！』とわざとらしい咳払いを入れると、人差し指をピーンと立てた。

「本日をもって！傘部を創設することにした！」

かあ部

また懐かしい単語が出てきたもんだ。

近隣の生徒からは嫌悪感を感じているような目線を受けた。

『傘部』

これは小学生だったときのことだ。確か小3の頃だったかな。

「小宮山明人！お前は完全に包囲されている！」

そう孝助を含む、愛理、一輝、翔平の4人に囲まれたことがある。

その時、一輝や翔平はやる気があるように見えたが、愛理だけはあまり乗り気で無かったのを覚えている。

創部には、最低5人の部員が必要だったので、只のメンバー集めのために僕はこの『傘部』に入部することになった。

kousukeの『K』、Airiiの『A』、syouheiの『S』、Akitoの『A』。

これらの頭文字をくつつけると、『KASA(傘)』。だから『傘部』になったらしい。なんとも小学生らしい案だなあと今だから思える。

因みに一輝がいないのは、孝助曰く、『Kは俺だけでいい。Kはリーダーだからだ』という理由からだとか。

「明人！お前を連行する！」

傘部は困っている人を助けるといって、意図がよく分からない部だった。

「孝助、この部活ってやる意味あるの？」

「じゃあ逆に聞くが、ドッチボール部の存在に意味なんてあるのか？」

「みんなとの交流を図るんじゃないの？」

「あんなに人にボールをぶつけて何が交流だ。」

アレがそのまま大人になってみる。お見合いするときボールを投げつけられるんだぞ？」

「そんなことはないと思うけど……」

孝助は理由をはぐらかす、というか微妙に納得出来るような出来ないような説明ばかりしてくれた。

ただ人を助けるための部活。

最初はどうなるのかと思っただが、意外にもそれは面白いものだった。

何よりも、みんなと一緒に何かをすることが楽しかった。

「嫌に決まってるだろう」

愛理は僕がしみじみと昔を思い出している時間を止めるかのような一言を放った。

実際に止まった。現実に戻された気分。

「何でだ愛理。昔なんか一番はしゃいでただろ」

「はしゃいでない！」

「『うっひょー！う　い棒の箱買いだー！』ってよく騒いでたじゃないか」

「どこのガキじゃー！」

確かにあの頃はみんなガキでしたが。

他のメンバーを見てみると、一輝は嫌々ながらも、心底嫌な訳でもなさそうだった。

が、翔平はいつも通りの表情。

「取り敢えず。俺はやらん」

席を立つと、いつの間にか弁当を食べ終わっていた。布に包まれ、鞆に仕舞おうとしている。

「何だ何だ翔平。昔みたいにお前の馬鹿力を見せてくれよ」

馬鹿力といったは例えが悪いけど、確かに翔平の力は凄いものだった。

台風の次の日に、コンクリートの重りで立っていたバス停が強風で倒された時、道路側に倒れたために道が塞がってしまった時があった。

大人ですら上げられなかったところに、翔平がやってきた。

その大人でも持ち上げることが出来なかったバス停を、翔平はいつも簡単に戻してしまった、という傘部の伝説がある。

「ふっ、孝助が始めることだ。どうせろくなことではない」

うん。すぐくろくでも無さそうだ。どうせ遊んでばかりなのだろう。

「…そんなこと分からないだろ？ほら、翔平も手伝ってくれよ」

「俺はもつといい方法を考える。みんなが幸せになれる、な」

みんな、とは僕たちのことか。つまり、傘部に翔平は入ったとしても楽しくないという遠回しな言い方だ。

翔平らしいといえば翔平らしい。

「そうかい」

孝助は、食堂から出ていく翔平を止めるわけでもなく、静かに見送った。

「いずれ分かれるときが来るさ、傘部の方が楽しいってなっ！」

『なっ！』つと愛理と一輝の肩を叩く。

「まだ入ると決めた訳じゃないぞ！」

「え…？俺、もう入ってんのか？」

ああだこうだと言いながら、結局入部させられてしまった。

僕らの高校は、部員が4人集まれば創設出来る。

それは翔平が抜けても可能な人数だった。

部室は、放課後の僕の教室。2-1組だ。

孝助は3年で別だけど、愛理、一輝、翔平とは今年から一緒。5クラス編成からなっているこの学年のことを考えると、4人が同じになるのは相当な確立だと思う。

「こうして、また傘部が結成されたわけだが」

孝助は教卓に手を付き、僕たちは目の前の席に座っていた。

「体制はこれまでと同じだ。『困っている人を助ける』、これがモットーだ」

方針的なことは変わらない。

だが、結局。小学校の頃そうだったのだが、孝助の独断な所もある。

些細なこと過ぎる相談を請けたかと思ったら、なかなか重要なことは請けないということもある。

「待て」

「はい愛理」

「そんなこと言いながらいつもお前の判断じゃないか」

空かさず愛理がツッコミを入れてきた。

「愛理…」

両手を上げると、やれやれとでも言いたそうな表情をしている。

「お前は何の教科が得意だ？また苦手な教科は？」

「うーん…得意なのは、体育。苦手なのは…数学、英語、それと…」

『ああもういい』とそこで孝助が止めに入った。苦手な方は数え切れないと判断したんだろうか。

…僕も愛理は多いと思う。苦手な方が。

「じゃあ3次関数の問題を100問解いたら1000円あげると言われたらやるか？」

「やらない」

「だったら、グラウンド10周したら1000円あげると言われたら?」

「やる」

なんと単純な!

しかも極端な例すぎるでしょ孝助!

「それと同じさ」

「なるほど...」

納得しちゃってるし!

僕は仕方なく、助言してあげることにした。

「とんでも無いことを丸く収められてるよ愛理...」

「ええ!? そうなのか!？」

愛理は相当単純な性格なんだろうな。

孝助にこれから目一杯いじられそうで心配だ。

「なあなあ、明人明人」

「何?」

さつきから黙って聞いていた一輝が問いかけてきた。

「丸く収めるって何だよ。何を丸くするんだ?」

何か、アレだな。

本当にこんなメンバーで大丈夫なのだろうか。

僕一人じゃ、やっていける気がしない。

翔平の存在が大きいなど、その時僕は再認識させられることになった。

「孝助」

「なんだ?」

いつも通りの返事をしてくれる孝助。

孝助には聞いておかなければならないであろうことを聞くことにした。

「僕たちは分かるよ。部活入ってないし、まだ『2年生』だし」

わざと『2年生』を強調してみた。

「でもね。孝助はもう『3年生』だ」

今度は『3年生』を強調した。

「そうだな」

「そうだな、じゃないよ。受験でしょ？」

「ああ」

季節はもう夏。高校3年生の人間がこんなことしている場合ではない。

行くところによってはAO入試というのが始まり、それを受けな
いにしろ、一般の推薦入試が待ち受けている。

こんなことしている場合ではない。

「ホントだぜ。お前、ついに何か悟っちまったのか？」

一輝が口を挟む。

「悟ってなんか無い。勿論、入試は受ける。AOをな」

この人は馬鹿なのか！もうAO入試まで3カ月を切っているのに！
まあでも孝助なら受かりそうで怖い。

「お前は……馬鹿か……？」

「馬鹿はお前だ」

『いいか？』と言い、指を立てる。

「この時期にこの部活を発足させることに意義があるんだ」

「何でだ？」

「よく考えてみる。」

この時期に部活を発足させるやつがどこにいる？」

「……………」

一輝の思考が止まった？

まあ大方の予想は、『発足』という言葉が分からないんだろう。

「まずいないね」

代わりに僕が返事する事にした。

「だからだ」

「…………え？」

大分長い間、沈黙が起きた。

最後の部分が前の文と繋がらなかった、ような…？

「明人、俺も今のは意味分からなかった」

一輝の手には電子辞書があった。どうやら『発足』という文字を調べたんだろう。会話に戻ってきていた。

「もう1回言ってくれ」

「ん？まあいいけど」

一輝は耳に手を当て、孝助の言葉を聞き逃すまいとしていた。

「この時期に部活を発足させるやつがどこにいる？」

「普通いないね」

「だからだ」

一輝と僕は見合わせる。

「おかしいよね」「おかしいよな」

ぴつたりハモった。

「俺は色々な反対もされた」

そりゃそうだろうね。

「だがな。俺は勉強することに飽きたんだ。この束縛されている空間に…！」

深刻そうな顔で話しているところ悪いけど、孝助は只単に逃げていることは分かった。

「逃げたんだな、お前」

愛理もそう思っていたらしい。口に出ていた。

「逃げるかいやい！」

「現実でそんな言い方する奴、初めて見たぞ…」

「馬鹿だからな、コイツ」

「全く…馬鹿はどっちなんだか…」

どう考えても孝助だね。

どんなことをしようとしても入試からは逃げられないのに。

次の日。授業中に、僕らのクラスの廊下にBOXが作り上げられていた。

そのBOXには、『キミの願い…叶えてしんぜよう！by篠原』と書かれていた。

このBOXに関しては、翔平が孝助に苦情を申し立てていた。どうやら、篠原翔平と勘違いされるらしい。

確かに、弟からすると傍迷惑な話だ。

そして昨日からの不安は全く拭い去ることが出来ないまま、放課後になってしまった。

「BOXに何か入ってたか!？」

何故かテンションの高い一輝。何だかんだで楽しんでいた。

この感じは懐かしい雰囲気もあって、僕も楽しんでいるけど、やっぱり足りないものを補いたいという気持ちもある。

「イケメンの俺が作ったんだ。そりゃあ入ってるぞ!」

「自分で格好いいと言ってるぞ、コイツ」

引きながら顔を歪める愛理。本気で嫌そうな顔をしている。

孝助はイケメンで女子からの人望は篤すぎるくらいだ。

高校に入ってから、告白された回数は数知れず、とか何とか。

「んまあい!!」

変な奇声をあげながらBOXを開封すると、紙が大量に出てきた。

その数は、一つの机では足りないくらいだ。

一枚確認してみると、『篠原さんはとても格好良くて、私の星でした(以下略)』とかそんな内容ばかりだった。

「これ…お前が全部書いたんじゃないだろうな?」

一輝が驚きながら一枚一枚紙を確認する。

そう思ってしまうのも無理も無い。

ほとんどが孝助に宛てたメッセージやラブレターだったのだ。

「俺はそこまでナルシストになった覚えはないぞ」
ある程度はなっただね。

それよりこの紙…というより手紙。

一つ一つ文字のクセが違うし、全部違う女子からだった。

「大体よ。お前が、キミの願いがどうたらって書いたからこんな事になったんだろ」

「俺は別に嫌な気分じゃないが」

「俺は胸くそわりいよ!」

僕はそんな会話をしている間、たくさんある手紙の中からある一枚の紙に目が行った。

『シャーペンを探してください』

「孝助」

「何だ？」

「これ…」

そう言って、気になる紙を渡そうとしたときだった。

いきなり地響きが起き、辺りが騒がしくなる。

「ふわあっ!」

愛理はビツクリし、机に伏せた。

一輝と僕は焦る。

なんだ？地震か？それにしてもやけに廊下が騒がしくなってくる。

「孝助さまあー!」

バン!と勢いよく音を出しながらドアが開かれる。その音ですらに愛理は丸まった。

どうやら、孝助のファンが来てしまったらしい。

チラッと山積みの中から紙を取り出すと、『抱いてください』とか色々書いてあった。

これは正直言うと、マズい状況じゃないのか？

だって、BOXの名前は、『キミの願い…叶えてしんぜよう!by

篠原』なのだから。

総勢は軽く2ケタはいつているであろう人数だ。

『抱いてー！』、『付き合ってー！』など、熱烈な声があがってしまっている。

「まあ待て諸君！確かに叶えるとは言った！」

『ひゃー！』と興奮の声が聞こえる。

「しかし全員とは言っていない。『キミ』だから、あくまでも一人だ。そしてそれは俺が決める」

孝助が喋り始めると、静粛になるファン達。

「だからね。君たちは待っていて」

『ね？』と付け足すと、怖いほどにぞろぞろと帰り出す集団。

孝助の力が凄いと云うべきなのか、集団が恐ろしく孝助に従者と云うべきか…。

少し、BOXの使い方を考えた方がいいらしい。

愛理がようやく起きあがると、話がやっと戻ってきた。

「これだよ、孝助」

「ああ、そうだったな」

気になった紙を渡す。

「シャーペンを探してください？」

捜し物というものは、小学生の頃にもあった。

『捜し物』という3文字で片づけていいものかと自問自答してしまっほど大変だったのを覚えている。

しかもこんなにアバウトでは、大体の場所が分からない。

「名前が書いてあるぞ」

一輝が紙の裏をのぞき込む。

『永本望』

まず本人に色々聞かないといけならしい。

「おしつ、決めた。探すぞ」のシャープン」

母とシャープペンシル

俺の母さんとはとっても元気だ。

いつも元気で頑固なパワフル母さんは、近所の人達とも仲が良かった。

そんな母さんは、俺を女一人で育ててくれた。

「お前は男なんだ！泣くななんて許さないよ！」

こんな感じだ。

収入源は母親からしか無いわけで、必然的に貧相な生活を送っていた。

しばらくしてから俺自身もバイトし、二人三脚で暮らしを支えていった。

「社会において、学歴は最大の武器だ。望！勉強だ！」

「ええー」

「ええー、じゃないよ！さあ勉強だ！」

そんな母さんの熱い熱い気持ちに吞まれて、俺は勉強を始めた。

特に趣味も無かった俺だし、勉強はいい暇つぶしになった。

「すごいぞ！望！学年で一番じゃないか！」

俺が学年で一番を取った教科は地理だった。

数学や英語では必ず『常連』と呼ばれる、それはそれは天才な奴

がいたために、全く一番にはなれなかった。

だが、そんな中、その天才でも不得意と呼ばれる科目があり、それが地理だった。

学年で一番を取ったことで嬉しかったのではなく、母さんに褒められたことが一番嬉しかった。

『お前は私の助け無しじゃ、全く駄目だからねえ』

母さんに、一度そんなことが言われたことがある。

その時までには言い返せなかったのだが、地理で学年一を取ったことで、少し自信にも繋がった。

そんなある日。

母さんは勉強している時に俺に話しかけてきてくれた。

「望。お前にはコレをやるう」

そう言い、俺に与えてくれたのは、一つのシャープペンシルだった。だが、只のシャープペンかと思いきや、色々と機能が付いていた。

「ほらほら見ろ！振ったら芯が出てくるんだぞ！？」

振りシャーと呼ばれる機能だった。相当母さんは気に入っているらしい。

目を輝かせていた。

他にも、グリップ部分は柔らかく、指への負担が全く無かった。しかし、気になったことが一つある。

「母さん。コレ、いくらしたの？」

「芯も合わせて1000円越え…はっ！」

『しまった』と言わんばかりの表情。

その当時の我が家にとつて1000円とでも貴重なものだった。収入源が俺と母さんの二人がいるとは言つても、母さんは殆どパートに近いくらいの給料しかないし、俺はバイトだ、大した収入は望めない。

だが、買ってしまったものは仕方がなかった。

俺はこのシャープンを肌身離さず持つていくことを決めた。

学業にとことん打ち込み、ついには学年一の天才を上回った。どの教科でも。

その度に母さんは俺を褒めてくれた。俺も嬉しかった、母さんに褒められることが。

そんな幸せの中、不幸というものは訪れた。

中学校が終わりに迫っていき、進路の相談が始まった時だった。

「今日、進路の相談だよ」

「そうかい。行ってらっしゃい」

その日もいつも通り、母さんは送り出してきた。

学校では、先生に『どこへでも行ける』と太鼓判を押され、母にもこのことを連絡しようと思っていた。

どんな顔をして喜ぶだろうか。

飛び跳ねるか？手を叩くか？俺の頭を撫でてくれるか？

俺は胸を張って帰宅した。

「ただいまー」

声が狭い家に響く、だが、いつもなら山彦のように帰ってくる母さんの声がしなかった。

一瞬帰っていなかったのかと思ったら、母さんは横たわっていた。

「母さん起きて。高校、どこでも行けるって」

そう言っても返事は無かった。

流石に様子がおかしいと感じ、母さんに近づいた。

そこには、口から血を流しながら目を瞑る母親がいた。

「母さん!」

母さんは昏睡状態のまま入院していった。

今になって思うが、あの日の母さんの『行ってらっしゃい』はいつもと違ったように思う。

優しさはあったが、元気が無かった。悲しみが強いようにも感じた。

そして俺は唯一の母親を失った。

それは入院して間もないことだった。

いつものように学校帰りに病院へ見舞いに行こうとしたとき、病院から電話が掛かってきたのだ。

お母さんが危ない、と。

俺は息を切らし、急いで病院へと走った。

結局、母さんは入院してから一度も目を覚ます事はなかった。俺を置いていき、一人、この世から去っていった。

医者に怒りを露わにしたりした。

だが、母さんの目は開くことがない。

家に帰ると、当然ながら一人孤独になっってしまった。

その時、俺は気づいた。

母さんの助け無しでは、全く駄目だということ。

勉強していれば自信にはなっていた。

が、それは確かなものではなかった。

それはあくまで幻想、幻覚だったわけだ。

俺はこれから一人でどうしていけばいいんだ。

「永本望^{ながもとのぞむ}。成績劣等、遅刻常連犯、目立った処分は無し」

「そんな情報、どこから仕入れてくるの？」

「孝助が急に永本君の話をするもんだから、それは驚いた。」

「どうせあの女子群からだろ？」

「おお、勘がいいな、一輝」

『やっぱりな』と一輝。

まあ、他にどう仕入れるんだって話にはなるか。

それにしても、あの一枚の依頼。シャーペンを探してください、ね。

「何でシャーペンなんだ？新しいの買えばいいじゃないか」

愛理が口を挟む。

まあ、最もと言えば最もな話だけど。あんなBOXに入れるほどだ。

「永本君にとつては大切なシャーペンじゃないのかな」

「おお、明人：成長したな…」

大層、孝助に驚かれる。ということは、合ってるのかな？

「孝助、知ってるの？」

「いや知らん」

「っ…なんだよ…」

思わずコケそうになった。

知っているわけ無いか、流石の孝助でも。

永本君は確か、一年生の時に同じクラスだった。

一回、地理で一緒に欠点を取ったことから、少し仲良くなった覚えがある。

そんなことで仲良くなるのもどうかと思うけど。

「追加情報」

永本君がいるクラスに入ろうとしたところで孝助が立ち止まる。

「中学校の時は成績優秀、英才だったそうだ」

「へえ」

なのに、何で高校になって欠点を取るようになつたのか。

「ということは、高校に入る前に何かあったんだろっね」

僕がこんなことを言うと、孝助たちが固まった。愛理はずっと疑問符を浮かべているけど。

「えーっと…その根拠は？」

「え、まあ、何となく、だけど」

孝助にいざそう聞かれると、どうなんだろう。よく分からない。だけど、そんな気がする、なんかそういふ感覚があった。

「永本望」

「何だ？」

「お前か。俺は篠原孝助だ」

「ああ、篠原さんっすか、あの紙見たんすか？」

永本君は前と全く変わっていなかった。

変わり者といえは変わり者かもしれない。けど、穏やかな人柄で、いつも周りに合わせる、出世型の人だ。

人との付き合いは恐らく、他の誰よりも良いだろう。

「そうだ。そこで色々と聞きたいことがあるから、放課後に2 - 1に来てくれ」

「ん。分かりました」

少し話ただけで孝助は、ささっと立ち去ってしまった。

詳しいことは、放課後に聞くんだろう。

何もないうまは気が引けたから、一応、挨拶だけはするようにした。

「永本君、久しぶり」

「おお、小宮山か。久しぶり」

一年ぶりに会った彼は、いつもと変わらなかった。

「変な部員が多いから気を付けてね」

「ああ」

小声で、忠告をしておくことにした。何が起きるか分からないからな。傘部は。

「おい永本」

心配した矢先に、愛理から永本君に話しかけた。

愛理から話を持ちかけることは、僕を含めた、孝助、一輝、翔平の4人以外には殆ど無い。

あるとすれば、本当に心の底から気になっていることを聞くことくらいだ。

今は、愛理自身に気になっていることがあるんだろう。

「お前、シャーペン持ってるじゃないか」

机に置いてあった筆箱には、シャーペンが2、3本あった。

「何でシャーペンがいるんだ？お前はシャーペンマニアなのか？」
愛理！さっきの僕とのやり取りを聞いていなかったのか！

永本君にとつては大切なシャーペンなんだよ！

「ふふ、まあ、そんな感じだ」

「ただ、永本君は特に何も言うわけでもなく、流した。」

「ふーん。変わってるな」

「よく言われるよ」

「相手を間違えたら一触即発もあるので、愛理には注意して見守っておく必要があるようだ。」

「昼休み恒例！どんな四文字熟語が出来るでしょうか！？ゲーム！
どんどんどん、ぱふぱふー！」

「いや、恒例とか、今初めて聞かされたぞそれ」

「それ以前に此奴、自分で効果音を発しているぞ」

「いやっほーう！」

「昼休み。いつも通り食堂へ行くと、みんながご飯を食べ終えたところを見計らって、孝助が立ち上がった。」

「勿論、意味が解らなかつたし、初耳だつたし、そのことに関しては愛理と翔平でさえツツコミを入れていた。」

「一輝一人はノリノリのようだけど。」

「ルールは簡単だ。まずこの紙切れに、好きな四文字熟語の前半の二文字と、別の好きな四文字熟語の後半の二文字を書く」

「孝助はみんなに紙切れを二枚ずつ配る。」

「そして、前半は前半で混ぜて、後半は後半で混ぜる。そしてそれを組み合わせるってわけだ」

「それで異色な四文字熟語が完成すると。」

「うっひょー！考えただけでゾクゾクするぜ」

「何でゾクゾクなのかは、敢えて突っ込まないでおく。」

「おい明人」

不意に翔平に耳打ちされる。

因みに、翔平は傘部に入部はしていないが、昼は僕たちと一緒にいてくれている。

「今の傘部はこんなことばかりするのか？」

「うーん…どうだろ…そうなるのかも…」

「救いようがないな。同情するぞ」

同情された。

こんなどうでもいい遊びでも、翔平や愛理は当たり前のように参加してくれる。

まあ、慣れっこということもあるかもしれないけど。

最後に僕が書き終えた時点で回収され、シャッフルが始まった。

「ちゃらーらーらーらーらん」

マジックをするわけでもないのに、マジックっぽい歌を歌う孝助。相当楽しいらしい。

「よし…、まずはこの二枚だ」

シャッフルが終わると、上の紙から捲られていった。

『一日 千金』

「おお…こいつは、まるでビルゲツのことが…？」

孝助が感動する。

変に上手いこといったな。これは。

「毎日多額の利益を得ること、的なやつだな」
冷静に解説する翔平。

「よし。次行くぞ」

『全身 相愛』

「うわ…これはエロいな」

孝助が照れる。って照れるな、気持ちが悪い。
何かこつちまで照れてくる。

「体の全部が…愛し合ってるのか」
冷静に解説しないで翔平。

「言つなあー！」

愛理が、ぱたぱたと翔平の肩を叩いていた。

「次、行くぞ」

『百発 難題』

「国公立の大学の試験のことなんだろうなあ…」

孝助が遠い目をする。あなた今年受けるんですよ、その難題を。

「もう全部難しいんだろうな」

段々、解説が適当になってくる翔平。

「よし、次」

『疲労 妄想』

「こらこら、受ける前から疲れている自分を想像するな」
さつき遠い目で見てましたよ、あなた。

「これからのお前達を疲労妄想する。とかだな」
使い方とかいいから、翔平。

「次で最後だな」

『家内 一番』

「なんだこいつ、定型的な二トじゃねえか…」
哀れな目で紙を見つめる孝助。

「しかもこの四文字熟語…自信すら感じてくるぞ」
「家内がいいんだろうね、やっぱり」

本当に、どうでもいい遊びだった。

因んで言うと、これだけで昼休みの大半を費やしてしまった。

「今日も楽しかったな。明人」

「何で僕に振るんだよ」

謎の孝助の振りで解散となった。楽しく無かったことは無いけど。

放課後になると、そろそろと教卓前へ集合する。

翔平はいつも通り教室から出ようとしていた所で、一輝に止められる。

「おい、翔平」

「何だ？」

翔平は部活も何もやっていない、要するに帰宅部。暇なのは暇な筈だ。

どうして傘部に入ってくれないのだろうか。

昔の翔平は結構こういうこと好きだったのにな…。

「お前も傘部に入れよ。お前も戻ったら、傘部が元に戻るんだ」

「お前はそれでいいのか？」

「…いいに決まってるだろ」

一瞬、言葉が詰まったが、突き通してくれた。

やっぱり、これからのことが気になって仕方ないんだろう。

僕も不安でいる。孝助が何を仕出かすか分からない。

「そうか。なら俺はお暇してもらおうぞ」

鞆を担ぎ、教室を後にする。

翔平が背負うと、とても小さく見える鞆が印象的だった。

一輝はそれ以上、翔平を止めることはなかった。

「明人」

ふと僕に話しかけてきた。顔を見て。

「何？」

「幸せって何だろうな」

「……え？」

もう一輝がそんなこと急に言い出すものだから、相当変な顔をしてしまったんだろう。

「何だよ、その顔は」

「だっていきなりそんな…気持ちわ…」

嫌な顔をしたら一輝にヘッドロックを喰らった。

「今のは俺もどうかと思うけどな」

一輝の腕を叩き、ギブアップしたところで孝助も教室に入ってきた。

「こいつら馬鹿だから仕方がない」

「確かにな」

愛理に同感する孝助。

一輝のせいで僕まで馬鹿になっちゃったぞ？

「と言うわけでだ永本。そのシャーペンはどこにありそうだ？」

永本君がしばらくしない内に教室を訪ねに来た。

いつもなら孝助がいるはずの教卓の前に立たせる孝助。

「まあ、それが分かったら苦労しないですけどね」

「だろうな」

孝助が僕の空いている隣の席に座った。

「普段はそのシャーペン、どこに入れてるの？」

僕は見上げる形で永本君に尋ねてみた。

「普段は…制服の胸ポケットだな」

ブレザーの左胸には、胸ポケットが付属している。

胸ポケット。わざわざそんなところに。

改めてこのシャーペン、何かあるな。

「何でそんなところに入れてるんだ？ふつう筆箱に入れるだろ」

愛理はまだ気づいてくれないのかな。このシャーペンに何かある

って。

「まあ、シャーペンマニアは大概、そこに入れるんじゃないか？」

「なるほど。シャーペンマニアも大変だな」

永本君は適当に愛理をあしらっていた。

どうやら戦力にならないと判断したらしい。

「常識に考えると、何か激しい動きをしたときに落ちそうだな」

一輝が珍しく妥当な推理を立てている。

「何かスポーツは？」

「いやー、何もしてないんですけどね」

スポーツはしてない。ということは行動が限られてくる。

これで調べる範囲が、ぐんと近くなったような気がする。

「うーん…」

唸る孝助。

それから間もなく手を叩いた。

「とりあえず、通学路を搜索だ！」

こうして、訳ありのシャープペンシルを搜索することになった傘部だった。

会議は踊る、されど進まず。

僕たち傘部は、休日を返上して搜索することになった。

「みつかんねえなあ！みつかんねえよ！」

「そんな簡単には見つからないよ…」

一輝と僕は永本君の家の近所を搜索している。

正直、シャープペンシル一本がこの広い世の中で見つかるのだろうか
かと疑う自分がいるけど。

残りの愛理と孝助と永本君は通学路を転々と搜索しているらしい
けど…。

永本君自身は探さなくてもいいのだけど、本人の意向によって加
わることになった。

「ねえ一輝」

「あんだ？」

「僕思っただけど、これって結構無謀だと思わない？」

永本君が通う通学路は短い方ではあるだろう。

僕の学校では、自宅と距離が近いと自転車通学が出来ない校則に
なっている。

永本君は徒歩で登校しているため、確かにそんな大した距離ではな
い。

しかしそれでも軽く100メートルは越えてくるのだ。

「この通学路には住宅街もあるし…」

「…確かに」

腕を組み、小さく頷く。

「とりあえずこの作戦はやめて、孝助に連絡しよう」

搜索を開始して早30分。また作戦を立てる必要があった。

よく考えたら、何で賛成したのか分からない。どう考えても無謀

だったのに。

「孝助。どう考えても効率が悪いよね」

「何でだ明人。何かいい方法を思いついたのか？」

「いや思いついてないけど…」

「じゃあ搜索開始だっ！」

せつかく校門前に集合したというのにすぐに解散させようとする孝助。

今日はやけに暑い気がした。休日がこんなにも忌々しく思ったのは久しぶりだ。

「待ってよ孝助！」

「何だ明人。何かいい方法を思いついたのか？」

「いや思いついてないけど…」

「搜索開始だっ！」

「間違ってよ孝助！」

永遠ループだった。

だからといって、これと言った案が思いつくわけでもない。僕も孝助も。

取り敢えずメンバー交代だけを申請してみた。

夏の初めとはいえ、そろそろ蝉が鳴き出してきた頃合いだ。

ブレザーというのは勿論ながら暑い。

しかしながら、永本君と一輝はブレザーを着用している。

一輝にはその件について聞いたことがあるのだが、一輝は「俺は近年希にみる寒がりなんだよ！」と訳も分からないことを吐き捨て、何故か逆ギレされたことがあった。

そんなことで、一輝は一つたりとも汗を掻いていない。

因みに寒がりは近年でも頻繁にみることが出来る。

そして、一方の永本君。

「あつっ……」

先程から搜索を再開してから、度々そう呟いていた。メンバーは僕を含めた、永本君、一輝の3人での搜索となっっている。

「じゃあ何でブレザー着てんだよ！」

ついに一輝からツッコミが入られる。

「合田も着てるよな？」

「俺は近年希少になりつつある寒がりなんだよ！」

希から希少に変わっていた。

永本君はそうやって話を逸らし、理由を教えることはなかった。まあ着たい人は着たいのかな。

……つてなわけないか。

よくよく考えてみるとおかしい。

普通の人はいくら寒がりでもこの時期になるとブレザーは着ていない。長袖すら着ている人は希だ。

ブレザーにも何かあるのか？大切なのであれば自宅に保管しておけばいい。

なのに一体、何故、今この時期に着る必要があるのか？

もちろん、ファッションであるという線は否めないけど、それでも無い可能性もある。

今考えるべき事は、今永本君が着ているブレザーは、ファッションの為なのか、また特別な理由があるのだろうか。

でも、そんなことを永本君に聞いても、恐らく話を逸らされるだろう。

ここは、情報網がとてつもない孝助に聞いてみるしかないのか。

「隣の客はよく柿食う客だって……ふふふ……。よく柿食う奴だってよ……俺みてえだな、ははっ」

ついに一輝が早口言葉で笑い出したところで、捜査は打ち切るところになった。

一輝はおかしくなってしまうたので、早々と帰って貰った。

日が沈むにはまだ早いが、徐々に暑さは消えつつある。

僕と愛理は孝助の家へと寄ることになった。孝助曰く、今後の作戦を考えるだとか。

「明人、小学校の頃、同じように落とし物を捜したことを覚えているか？」

いきなり何を話すかと思えば、小学校の時に捜し物をしたことだった。

「確か、家にあっただよね」

あの捜査は大変だった。只でさえあの頃は考えがよく出来ていなかったのに、学校中を永遠と探し回っていた。一週間以上も。

あの時は一輝が『俺に任せろ！』と言い、指揮官は一輝になっていた。

今になって振り返ると、何故初めから孝助に頼まなかったんだろうと思うし、何故孝助は仕切らなかつたんだろうと思う。本当に大変だった。

因みに、その捜し物を見つけたのは、依頼者自身なのだ。

「そうだ。今回も実は家にある、かもしれない」

家に、か……。何か引つかかるな……。

「…本当にそうかな？」

「というと？」

「そもそも、この件は情報が少なすぎる。『通学路に落としただかも知れない』っていう予想しかないんだ」

小学校の頃は違った。あの捜し物は色々な情報があった。

いつ落としたのか、どの辺で落としたのか、とか。

まず、確かめるべき情報は『いつ落としたのか』だと思う。

「とりあえず、このシャーペンをなくした日考えた方がいいような気がするんだ」

「…そうだな」

眉間にしわを寄せる孝助。愛理は違う意味で眉間にしわを寄せていた。

一つ一つ情報を組み合わせ、照らし合ったら何か解る。

…ってそんな保障は無いんだけど、何だろこの感覚。前に誰かに言われたかな、この思想。

「まあ、家という可能性も無くは無いかどね」

どうやら永本君には聞くことが色々あるようだ。

「毎年恒例！お互いにあだ名を付け合おう大会〜！！FOOOO！！！！ It's cool！！！！」

一輝が、ようやく回復したのか、孝助の家にやってきた。

意外とみんなの家は孝助の家に近く、便利な場所でもあった。

僕たち傘部で何回もここの部屋で寝泊まりをしたことがある。

隣の部屋からは翔平も現れた。やっぱり傘部以外のことでは参加してくれるらしい。

「そんな大会したことあるか？」

「愛理は覚えてないだけだあ」

「うるさいばか」

なでるような声で愛理を説得する。勿論、説得出来ていなかった。

「俺も…あんま覚えてないような…」

「一輝は寒がりだからなあ」

「ああそうか」

またなでるような声で一輝を説得する。何故か説得させられていた。

「俺の記憶によると無いな」

「翔平はシヨウヘイヘーイ！！だからなあ」

「ネタが尽きてるぞ」

翔平を説得させる言葉はなかったようだ。

それにしてもまた変な大会が始まってしまった。

僕は一人頭を抱えていた。

こんな調子でいいのか…？

「俺達はもう切っても切れない長年の付き合いだ」

僕が孝助達に包囲されてからもう約10年近くになる。何かとてつもなく長く、永遠とした日々のように思い返す。

「だが、呼び方はどうだ？ 実際問題、『お前』や『こいつ』呼ばわりだ。終いには『馬鹿』だってあった」

因んで言う必要も無いと思うけど、馬鹿呼ばわりしたのは愛理と孝助だ。

「逆に慣れ親しんだ感が出ていいんじゃないか？」

翔平が反発する。幼なじみが今更あだ名で呼んでいる人はあまり見たこと無い。

「というわけでっ！ここにあみだくじがある。5番まで書いておいた」

あくまで楽しむだけなのだろう。最もな事実には触れない孝助だった。

サツと紙切れを出し、そこにはあちらこちらに線を書き巡らされておおり、番号が1番から5まで書いてあった。

「好きな所を選べ。諸君。番号が若い者が次の番号の奴のあだ名を決める、いいな？」

一輝を筆頭に、他のメンバーも渋々書いていった。

その結果は、1番から順に、愛理、一輝、僕、翔平、孝助となり、愛理は思った以上にわくわくしていた。一輝にどんな卑しい名前を付けるのか楽しみだとか。

「よし。まずは愛理から一輝に対してだ」

「ゲス犬」

「うわぁ！単刀直入！！」

速攻だった。

一輝がうずくまっていた。悶え苦しんでいる。

「こいつは…なんて意味の深いあだ名なんだ…！」

感動する孝助。

愛理の表情を見ると、相当ご満月な様子だった。

「意味なんてあるかよぉ…！！」

ぐざりと音が聞こえてきそうな程苦しむ一輝だった。

度々、一輝と愛理は対立し合っては喧嘩が勃発していた。そんな付き合いであつてか、ライバル心はお互いあると思う。まあ、一輝はそのライバルに見事踏みにじられた、という形になった。

「よし。次は一輝から明人だ」

「明人…明人なあ…」

散々悩んだ拳げ句。

「アツキート」

静まりかえった。驚くほどに。

外で無く蟋蟀の鳴き声が虚しく部屋に響いた。

「アツキートナがいるんだからアツキートはオツケーだろ！？」

「何ていうかだな…。もう少し笑いがあるのかと…」

翔平が言ったことと、みんなが思っていることは同じだった。普通のあだ名だった。

何か、僕らしいと言えば僕らしいけど。

「へっ…！そんなこと言っているのかよ？ハードルが上がるのは…お前等だぞ！」

「しまった…！」

一輝がボロボロになりながらも言い放った一言は、残る僕達を震撼させるものだった。

「よし。冷め切った所で明人から翔平だ。すべろ」

孝助の本音が出ちゃってる。

翔平か…。

翔平のいじれるところと言えば…髪型。かな。

孝助と似て、色や髪質は一緒だけど、髪型はオールバックで、下ろしている髪型の孝助とは正反対だ。

客観的な意見かもしれないけど…。

「ヤンキー」

オールバック怖い。

「誰が不良だ！」

空かさず翔平から反発された。でもこれは仕様がなしたことなんだ…。

僕にはこれくらいしか思いつかない。

「うん、確かに言われてみればヤンキーだな。我弟ながら怖いな」
腕を組みながら、うんうんと頷く。

「だが愛理は怖がること無かったぞ」

「いつからオールバックにしたの？」

僕の記憶では、少なくとも会ったときからオールバックだった。

「丁度愛理が入部するときだ。誰かに『目つきが悪いから』ってオールバックにされたんだ」

その誰かは大体検討がつくので聞かないことにした。

というか、愛理はよく怖がらなかつたな。ああ見えて結構恐がりなのに。

「そついやそうだけ。愛理は怖くなかつたのか？正直俺は初めてあったときは玉が萎んだぜ」

初めてあつたときのことを思い出しているのだろう。一輝が股間を押さえていた。

「んー。なんかコイツは悪い奴に見えなかつた」

「はあ！？どう見ても悪い奴じゃねえか！ぐわふう！」

チヨキで一輝の顎下を下から突き刺す翔平。…チヨキで？
愛理からすれば何か感じるものがあつたんだろつな。直感的なやつか。

「よし。翔平から俺だ。来い！」

「孝助か」

兄弟がお互いにあだ名を付けるといふのも変な話だなと誰もが思っていると思う。

「ナルシスト」

「あーなるほどな」

「うん」

確かに合ってるっちゃ合ってるな。

「おいおい、納得するな！だからそこまでナルシストになった覚えは無いって！」

「じゃあ半人前ナルシストでどうだ？」

「おっ…いい響きじゃねえか…」

判断基準がまるで意味不明だ。

「コイツ変態だっ！」

愛理が心底思っている言葉を叫び轟かせていた。

「さて。最後は俺なわけだが…」

変な余韻に浸っていた孝助がやっと正気を取り戻し、愛理のあだ名を考え始めた。

『コイツはすげえや…』とか『んーう、Very Begginne』

とか、変な独り言を交えながらも、考えがまとまったようで。

「聞いて驚くなよ…」

「あ、ああ…」

愛理をギツと睨み付け、何かしらの変な空気になった。

「ロリツンデレく明人がいないと何も出来ないよ」

「んうなあああ！！！！」

即座に飛び膝蹴りが入った。本当に一瞬の内だった。

「ほ、本当のことじゃねえか！」

「本当じゃないー！！」

ドストロスと孝助の頭を叩き続ける愛理。因みにドストロスという擬音は強ち間違っていない。

何て言うか…なんだろう、サブタイトル的なものが付いていたぞ。

「どーどーどー」

「うう…！うう…！」

何とか愛理を宥めると、愛理は軽く半泣きになっていた。

「確かに小さいけど…ツンデレでも無いし明人がいなくても出来る！」

小さいことは認めるが、ツンツンするところとデレデレするところと僕に頼っていることは否定するらしい。

4つの内3つも否定したぞ。大体間違っていなかったのに。

「明人！孝助がいじめてくる！」

「そういうところじゃないかな」

いきなり矛盾するような発言しないでよ…。

でもまあ、そんなところが愛理の魅力でもあるのかもしれない。

毎回思っただけど、そんなに対して整ってないわけでもない、寧ろ可愛いぐらいの容姿があるのに何でもっと視野を広げないんだろ
う。

いつも僕達（主に翔平と一輝）に着いて回っているから、男前も近寄ろうにも近寄れないと思う。

もし近寄れても心を開かないから同じなのかな。

「今日も楽しかったな。明人」

「だから何で僕に振るんだよ」

結局、本当に呼べそうなあだ名は『アッキート』だけだった。

翌日。僕達は本当に休日を返上してまで捜査をしていた。
昨日と同じ、家の近所と通学路を転々とする。

始まると同時に一輝の目が白くなっていくのを僕は見逃していなかった。

メンバーは僕と孝助と永本君の三人になり、愛理と一輝のチームがとても心配になったのは言うまでもない。

「いいか？一輝達には内緒にしておくから、お前は永本に話を聞いてこい」

永本君が少し離れた所で捜索をしていたときに、孝助からそう耳打ちされた。

永本君が教えてくれる保障は全くないけど、聞けるかどうかは僕に掛かっている。

恐らくこれが大事なチャンスになるだろうということは僕自身理解していた。

「もう一週間もかけないようにね」

「…ああ。その意気だ」

今日もよく晴れた雲一つ無い空。

少しでも早く決着をつけるために、決意を新たにした。

過去と未来と現在と、

「小学校の時はね、こういう机の隙間とかに…あつただけどなあつ！」

勉強机と壁の隙間に手を突っ込んでみる。

無いと思いつながら手も突っ込んでみたものの、実際に無いとも悲しい。

「一応そこら辺は探したぞ」

「そうらしいね…」

まあそんなことは分かってたけど…。

大事なシャーペンだし、家には絶対と言っていいほど無いはず。僕達に依頼するほどなんだ。家中探し回ったと思う。

じゃあ何で僕は永本君の家に着たのか。

それは昨日言った『情報』を集めにここへ来たんだ。

「家にはありそうかな？」

「ん…どうだろうな」

あくまでも永本君はそう言うけど、永本君には確信があるんだろな。見つからないって。

永本君の家はそう広くはない、1LDKだった。

「えっと、永本君は一人暮らし？」

「今はな」

「昔は家族でここに？」

「そういうことだ」

過去形で永本君はそう言う。

とは言っても、この広さで家族はちょっと狭すぎるような。

1つの部屋には勉強机と引き出し付きの本棚があるくらい。ダイニング兼キッチンであろう部屋には、生活が可能な最低限の電化製品と卓袱台が一つだけ置かれていた。

家族、か。

僕も『家族だった』という人の一人だ。
失ったものは大きかった。両親という人物がいなくて、こんなにも不便になるとは思わなかった。

確か、お父さんのお母さんに当たる人に育てられたんだっただけかな。
それでも、孝助達と出会ってからのというもの、ずっとお世話になりっぱなしだったことを覚えている。

「永本君の家庭って母子家庭なの？」

そう訪ねた瞬間、少し永本君の眉がひそめられた。

「…そんなことを聞いてどうするんだ？」

「いや、僕もそんな感じだったからさ」

僕の場合は母子家庭とは言わないけどね。

「まあ…母子家庭だったな」

また過去形。引つかかるな。

昔はここにお母さんと住んでいたのに、今はそのお母さんが出ていった形になっている。

流石にそんなことはデリケートな部分だから聞けるわけがない。

そこは聞いてはいけないのがマナーだと思う。

「そうなんだー…」

「……」

「……」

「……」

話終わったあー…。

まあでも情報はちよっと集まったのか、な。

というかこれだけの情報だったら、別に外でも聞くことが出来たな…。

「あーあのさ。永本君は何でどうしてもそのシャーペンが必要なの？」

「だから頼んだんだけどな」

「その通りでした」

机の下や電化製品と壁との間。ちょっとした隙間とかも調べたけど、結局何も見つからなかった。

残るは本棚とそれに付いている引き出し。

さて、どうしたものか。

こんな分かりやすい場所を永本君が探し忘れるはずがない。

うーん。でもまあ、もしかしたら。っていうことがあるかもしれないし、

折角、家にお邪魔させて貰ったんだから、ここくらい調べておくか。

そう思つて、引き出しを開けようとしたときだった。

「触るなよ」

「え……」

「手が拳がっつても知らないぞ」

永本君が思わず手を挙げるような物があの引き出しの中に入っているのか……？

「もういいだろ？トイレ行っておくから、先に外出てる」

「あ……」

このタイミングでトイレ。もう見てくださいって言ってるようなものじゃないか……！

でも永本君が手を挙げる程か……。

「本当にやるからな」

トイレに行く前までそう釘を刺された。

とは言つてもここまで来たんだし調べない訳がないじゃないか！

僕は物音を立てずに、丁寧に引き出しを開けた。

「こ……っ！」

思わず『これは！』と叫んでしまいそうになり、手を塞ぐ。

トイレの方角に目をやるが、永本君はまだ出てきていない。

僕はゆっくり引き出しを閉め、難無くやり過ごすことが出来た。

ずばり。僕が目にしたのは未成年後見人選任申立書の見本だった。

勿論。この資料が何を意味するのかは分かっていた。

『母子家庭だった』という言葉と『後見人』という言葉から、一つの仮定が生まれる。

永本君のお母さんは亡くなっているかもしれない。ということだ。

後見人というのは、両親を失った子供の親の代わりをする人のことである。

僕の家にもこんな資料があったことを思い出す。

これ一枚から、後見人が決定する第一歩が踏み出されるのだ。

永本君は恐らく、何らかの理由でお父さんを失ってから母子家庭に育っていたけど、

ある時期にそのお母さんが亡くなってしまったのだろう。

…どうやら小学校の頃みたく、簡単に行くとは思えなくなってきたぞ。

捜査は一進もなければ一退ばかりのようだった。

一輝の様子を一目見れば分かる。

ただ死にかけていた。

「俺の寒がりは九州譲り〜俺の暑がりも四国譲り〜」

不協和音で謎な歌詞を歌っていた。

「明人」

すると不意に孝助から声を掛けられる。

永本君宅での成果を聞きに来たようだった。

僕は孝助に向かってVサインをしてみると、大層驚いた顔をしていった。

「まあ、確証は無いんだけどね」

「十分だ十分だ。後でその話、聞かせてもらおうぞ」

確証は無いと言いながらも、結構自分で自信があったりする。そろそろ日も傾いてきたことから、捜査は打ち切りとなった。

孝助の家には、いつもの面々が揃っていた。

一輝は捜査の後、死にかけだった所が本当に倒れこんでしまい、翔平が自宅から緊急招集させられることとなった。

ぶっ倒れた一輝を担いで運べるのは翔平しかいなかったのだ。

こういうときは使えないがたいだと感じた。

翔平には部屋まで運んでもらい、そのままの流れで傘部に参加してくれるかな、とか儂い期待も空しく、そそくさと自分の部屋へと戻って行ったしまった。

やっぱり翔平は傘部のこととなると、一切話に触れなくなる。

昔はそんなことなかった。というか逆にこんな馬鹿げたことには積極的に顔を出す人柄だった。

いや…でも、今でも傘部以外のことはちゃっかり居るし…。

このことは兄である孝介がよく知っていることだ。またいつか聞いておかないと駄目だなと思う。

それより今は、永本君の問題が優先的だ。

こういうことは切り替えが大事なんだ。そう切り替える。僕。

「翔平はやっぱり来ないね…」

切り替えていなかったー…！

「しんぱいしないさー」

「コイツ、とんでもなく棒読みだぞ」

孝介は棒読みで肩を叩いてくれる。

翔平を呼び戻す気があるのだろうか。この人の脳内には。

「えつとね」

咳払いを一つ入れると、やっと本題に入った。

孝介は足を組み、愛理はきちんと正座をして耳を傾けてくれている。一輝はまだ目が真っ白だった。

「僕が思うに、永本君には両親が居ないと思うんだ」

「…ほう、その理由は？」

「永本君自身が『母子家庭だった』って過去形で言ったことと、後見人の資料が出てきたことかな」

僕が『後見人』というワードを使用すると、僕の私事を知ってか、みんな遠慮する。

だけど、孝介や愛理、一輝と翔平だけはそんなことはない。

『気を使われるのが嫌』という僕の気持ちを理解しているからだ。腕を組み、少し笑みを浮かべる孝介。

それと対照的に、愛理は少し悲しい表情。

「この二つのことから、お父さんが先に亡くなってから、お母さんが亡くなったと思うんだ」

「…悲しい話だな」

反応してくれたのは、孝介ではなく、愛理だった。

恐らく、僕と永本君の話が重なってみえているんだろう。

「僕も確信があって言ってるわけじゃないよ。あくまでも予想だし

…」

「少しは自信を持ったらどうだ？」

孝介が肩をぽんぽんと2回叩いてくれた。

「まあ…そうだね」

自信は無くもない。

どちらかといえば『ある』。

絶対的な確証があるわけではない。ただそう思うだけだ。

永本君と僕は少しばかりではあるが似ているんじゃないかと思っ
ている。

後見人の人が言うには、僕の父さんは僕が生まれる前に亡くなっ
て、母さんは僕の物心が付くまでに亡くなったらしい。

順番は父から母。ただそれだけが永本君と被って見えてしまっ
うだけだ。

少し場の空気を変えるために、昨日訊きそびれてしまったブレザーの件を孝介に尋ねることにした。

「永本君つてずっとブレザー着てるよね。アレ何でか知ってる？」
「いや知らん」

何とも言えない程の即答だった。

そういえば孝介は今回に関して全く情報を知っていない。

本当は全てを知っているのではとか疑うけど、孝介が『知らない』
と言えば知らないことになる。

孝介が言ったことは絶対だ。嘘であろうと本当であろうと。

だから僕はこの言葉を真実だと受け止めている。

孝介からの助けが無いとは言っても、これからは僕と永本君との間
しか理解し得ない問題じゃないかなとも思ったりしている。

両親を失ったお互いだからこそ、解ることもあるんじゃないのか
な。

まあ、あくまでも予想にしか過ぎないけど。

『少しは自信を持ったらどうだ？』という言葉が脳裏に過る。

自信はある。でも不安も同等にある。気持ちが悪い感覚なんだよ
孝介。

次の日。平日なので勿論一日中捜査は無い。

そんなことがあってか、一輝のテンションが高かった。

「アッキート！」

「明人でいいよ、」

『ゲス犬』と後に付け足そうかと思っただけど、流石に気落ちされ
ては困るので避けておいた。

「部活行こうぜ部活」

「まあ、待つてたら始まるよ」

放課後の我がクラスの教室が部室。太陽からの光が差し込み、眩しい限りだ。

翔平は相変わらず釣れないようで、もう教室には残っていない。

愛理、一輝、僕。

気が付いたら孝介を待ついつものメンバーだった。

「俺たちが揃っても、ご本人がいないとな」

孝介がそう言いながら教室へやってくる。

ご本人とは永本君のこと。

委員会があつて、集合に大分遅れた孝介が来たのにも関わらず本人はやってこない。

とてつもなく嫌な予感がする。

「因みに、永本はちゃんと遅刻して登校してきたそうだ」

「うーん……」

思わず唖つてしまう。

「ちっ……めんどくせえなあ」

一輝も解つたらしい。

永本君は今日、学校へ来ていたにも関わらず傘部へは顔を出さない。

何かあつたんだらう。

「シャーペンの前に永本から探すぞ」

手を柔軟を始める孝介。ジャンケンのサインだ。ゲーとパーに分かれるアレだ。2人と2人のチームに別れるのだらう。

「準備はいいか!？」

「来いやあ!」

孝介と一輝だけがノリノリの中、ジャンケンが始まった。

「ぐっぱーおうたらえーのになー」

何で大阪の方式を採用したのかは不明だし、今更ツツコミを入れようとも思わないぞ。

さて。そんなことはとにかく。どういう状況になったものか。

とりあえず、とんでもない展開にはならないで欲しい。

やっぱり。一筋縄ではいかないような気がしてきたぞ。

内に秘めた過去

「永本君はどこにいるかな」

「知らない」

チーム編成は僕と愛理の二人になった。

正門を出たところで孝介たちと二手に分かれたのはいいけど、このだだっ広い町のどこを探せばいいか判らないでいる。

「だろうね」

「ただ予想は出来る」

予想か…。

とんでもないものでないことを願う。

「お慕だ」

愛理は人差し指を立てると自慢げにそう言った。

「…は？」

恐らく永本君の両親のことだろうとは思っけど。

だったとして、何故このタイミングで？

年忌とか？それだとしても連絡の一つくらい…。

「違う、か？」

「…」

だけど、愛理のこの予想は否定できないでいた。

だんだんそんな気がしてきてしまう。命日で無いにしても。

「…そうかもしれない」

「だろう？」

僕がそう認めると、嬉しそうに笑う愛理。

そこには可愛らしい無邪気さを感じた。

大体。この問題には『永本君の両親』というのはキーになっているはずだ。

何かしら今回は親だのどうのこの絡んできている。

僕の仮定が正しいとすれば、永本君のお母さんがいつ亡くなったのか、ということになるけど。

これに関しては、孝介が一番最初に僕に与えてくれた情報が引っかけかっている。

『中学校の時は成績優秀、英才』。

だけど今は僕と地理で欠点を取っている。だから高校へ入学する前に何かあったと思っていた。

そこから『僕の仮定』と『高校入学前の出来事』という言葉から、新たな仮定が生まれる。

『永本君のお母さんは高校入学前に亡くなったかもしれない』ということだ。

真実か判らない仮定でも、いくつもの仮定が積み重なっていくと真実になる。

孝介が僕に諭してくれた言葉だ。

段々とはあるけど、真実に近づいていっているのかもしれない。

「電車なんてなかなか乗るものじゃないね」

「そうか？私は前にも乗ったようなことがある気がするぞ」

平日のまだ夕方にもならないくらいの時間帯。

車内は驚くほど人影が無く、静まり返っていた。僕と愛理しかいないくらいに。

校舎から最寄りの駅までは徒歩で15分くらい。家を購入する際にはそのくらいの条件だと有り難く感じる距離だ。

駅から最も近い墓場なんて、断然分かるものではない。

ではどうして電車に乗っているのか。

それは、行く当てがあったからだ。

「それにしても、どこまで行くんだらうね」

「シャーペンマニアだからすごいとこまで行くんじゃないか？」

二両先には永本君の姿があった。
僕たちがちょうど駅に到着したとき、私服姿の永本君を発見したのだ。

「というか訊けばいいだろ」

「訊きたいところだけどね…」

永本君の行き先。そこが気になって仕様が無い。

もし僕たちが急に現れたら、またはぐらかされてしまっただろう。

それでは意味ないんだ。

永本君は一点をずっと見つめているようだった。

あ、いや、二両先だからよく分からないけど。

孝介達にはメールを入れておくと、一輝から『やったなっ！（笑）』と返ってきた。

その一文には一輝の嬉しさなど、プラスの思考がひしひしと伝わってくる。

そして、永本君の方はというと全く降りる気配が無い。

流石に日も暮れ始めようかとしているのに。

最初の方は適当に時間が潰れていったけど、暇を持て余してしまっ

う。
周りの景色の様子を見ると段々と建物が無くなってきていた。

「愛理。ジャンケンしようか」

あまりにも暇すぎて孝介のような発言をしてしまった。

因みに『意味の無い言動』のことをいう。

「ん…」

「なあ、あい」

最初はグーのグーのポーズまでしてしまったとき、愛理は眠りに落ちていた。

普通に寝ているのなら構わない。いや、普通に寝てるから駄目なんだ。

もう自分自身何言ってるか分からなくなってきたぞ。

その、なんだ。今、愛理が相当可愛く見えてしまっている。

「愛理ー？」

僕がそう言っても勿論ながら返答はない。

静かな寝息を立てて眠っているその横顔を何とも言えない愛らしさがあつた。

「んうー…」

電車の揺れによって愛理の頭が僕の肩に乗っけられる。密着する小さな体。

ありがとう電車。いや、この場合はこういう揺れが起きるようになってる線路に感謝すべきなのか。

…何言ってるんだ、僕。

さつきから鼓動が止まらない。

小さい頃からこういう偶にドキッとするときがあつたけど、このケースは初めてだ。

大人っぽさが増しているのに可愛さもあつて…、頬なんてすごく柔らかそうだ。

じつと愛理の顔を見ていると、こつ、胸がくしゃくしゃになってくる。

「あーいり…」

見つめていると色々なことが分かる。

顔が整っている、ノーメイク、綺麗な肌。

小さい体、シャンプーの匂い。車内は僕と二人きり。

…いやいや！何を考えているんだ僕は！

こついうときは、そつ。裁判をしよう。

『というわけで、脳内裁判を開廷する。今回は「密着する愛理をどうするか？」だ』

『これは一種のチャンスだ名人。この機会を逃してどうする？』

『貴様は馬鹿ですか。愛理は確かに可愛い、ですが、今まででも手

を出したことがありますか？」

『は？何言ってるんだ？誰も「手を出す」なんて言ってるえんだけどな』

『しまったあ！』

『けっ、お前にもそういう心があるってことだ、あきらめな』

『で、では、どこまで手を出す気なのですか…？』

『そりゃもちろん…にゃんにゃんしちゃうおうぜ！』

『にゃ、にゃんにゃんだなんて！そんな卑劣な！』

『男つてのはな、時には獣にならなきゃいけねえ時がある…』

『…確かに…今のこの世。草食男子が蔓延んでしまっています…』

『今こそ立ち上がれ。明人』

…何だこれ。

最後の方、協力しちゃうってるじゃないか。

とか心の中で思っている中、思わず僕は手を伸ばしてしまっていた。

草食系男子より、肉食系男子でしょ！

「なんだ二人して。俺に見せつけに来たのか？」

頬に触れるまで3センチ。

我に返ると、花束を持っている永本君が目の前で唾然としていた。

頭の中が真っ白になる感覚が分かる。

「…愛理には言わないでください」

冷たい目線を前に、僕が苦し紛れに言えた一言はそれだけだった。

「仲がいいことで」

「何言ってるんだ？」

「なんでも無いよ愛理。そう何でもないの」

すぐる様な目で永本君に訴えかけた。

駅に着くとそこは田舎の中の田舎。何一つ無かった。改札機があ

ることに違和感を感じるほどに。

「まあいい。ところでここはどこだ？」

愛理はまだ車内からの景色が都会だった内に寝てしまったらしく、覚醒すると周りに何もなかったことに大層驚いていた。僕も驚いた。

「ここは母さんが生まれた町なんだ」

そうさらっと永本君は告げる。

…ということは墓参りの可能性が一気に真実へと近づく。ここまで来ると流石の永本君でもしらばつくれることは無かった。愛理の予想も捨てたもんじゃないな。

数十分歩くと、墓が密集している場所へとたどり着き、愛理の予想が当たることとなった。

密集しているといっても4、5基くらいで小規模である。

『穂積家之墓』と記された墓で永本君は足を止めた。お母さんは穂積、お父さんが永本、なのだろう。

持っていた花束を綺麗に整えると、バランスを考えて供えていった。

「ここがお母さんの？」

「ああ」

永本君がそう肯定したとき、僕の『仮定』が『事実』になった。今、両親がおらず、後見人の元で育てられているということだ。

「『穂積』っていうのか」

「ああ」

線香の匂いが僕の鼻を擦る。

墓は思った以上に綺麗にされていた。誰かが半年も経たないうちに来たみたいだ。

永本君が合掌を始めると、続くように僕と愛理も手のひらを合わせた。

「…」

永本君のお母さんってどんな人だろう。

ふとそんなことを考える。

クールな人、冷静沈着な人、落ち着いている人。

まず最初にそんなイメージが思いついたがあまりピンとは来ない。意外と活発だったりして。かなりポジティブな。

まあ、永本君自体が謎なわけで。さらにそのお母さんとなると、もっと謎めいている。

「…ふう」

一息ついて目を開けると、永本君はまだ目を瞑っていた。愛理の方はとくに合掌を終えていたが、永本君の方をじっと見つめている。

何を考えているのだろうか、愛理はずっと永本君を見つめていた。その顔は不思議そうにしている感じにも見えるし、何か悲しい表情にも伺えた。

「…すうー…ふうー…」

深く深呼吸をした後にゆっくりと瞼が開けられる。

その目は電車に乗っている時に見た目のようにも感じた。

「よし」

ようやく合掌を止めたかと思ったら、いきなり墓の前に堂々と座り始めた。

「話すぜ。全てを、な」

【By Nagamoto】

小宮山は拍子ぬけた顔で突っ立っていた。

松坂の方はそうでもないらしい。

「結局。お前は、両親がいないんだな」

最初に質問してきたのは、意外にも松坂だった。

「そうだ。父さんは俺が生まれてから雲隠れ。母さんは亡くなった」
… 案外考えてんだな松坂。
シャーペンマニアばかり気がいつてるのかと思っただらそうでもない
ようだ。

「あの、そのお母さんはいつ亡くなったの？」

「やっと我に戻ったのか、はっとした表情で俺に質問してくる。

母さんがいつ亡くなったか。

「そっか… あれは確か…」

そんなこと忘れるはずもない。11月の寒い時期だった。

「進路相談が始まったあたりだったか？」

「いやいや、こっち訊かれても…」

「悪い悪い。中学が終わるころだよ」

「つつい曖昧な感じで言ってしまった。流石に終わらしてもらわ
ねえと困るのにな。

「あれは運が悪かった。病院へ駆けつけたら暴れちまったよ」

「運が悪かった？」

「ああ。医療ミスだ」

母さんが亡くなった理由は医師の手術ミス。まあ、人間なんだか
ら必ずしも失敗なんざある。

「とにかく暴れたな。頭は真っ白だったが、殴っては無いはずだ。
うん」

他の医者や俺らの遺族に止められたような気がする。そんなこと
はあまり記憶には無いが、

その時の担当の医師の苦痛な表情は今でもはっきりと覚えている。

その顔を思い返すだけで前までは苛立ちが出てきてしまったが、今
は全く正反対、慈悲するばかりだ。

「そっか…」

小宮山は顎に手を当てると唸り始めた。相当考えているらしい。

「お前、何でブレザー着てるんだ？」

隣で一生懸命唸っている小宮山を置いて質問してくるのは松坂だ

った。小宮山が『ああもう』と悔しそうな表情を作っている。

「あれはな。感じんだよ、母さんをな」

「は？」

胸に手を当てて説明してみたが松坂には通じてなかった。まあいや、恐らく小宮山なら解ってくれるだろう。

あのシャーペンを胸ポケットに差していると、母さんをいつでも感じる事が出来るような気がしたんだ。

頑固で意地っ張りだけど、優しい思いやりのある人。

そんなことを毎日、明るる日も明るる日も感じる事ができたんだ。

「他には？」

「あ、そうだ。大事なこと訊いてなかったよ」

ぼんと手をたたいているあたり、どうやら閃いたらしい。

「そのシャーペンってさ、いつ無くしたの？」

「さあ！？」

「いやそんな投げやりな訊かれても！」

つとは言われてもだな……。本当に分からないからお前たちに頼んでるんだ。

「分かることは、母さんが生きている間はあったことだ。これは確かだ」

俺は母さんがいなくなっただけからは生き甲斐が無くなったような気分になった。

何を目標にして俺はどこに向かえばいいのか。全くもって分からない。

ふらふら心の中で彷徨っている内に後見人が決まり、顔見知りの親戚がやってきた。

進路は一番近い高校にした。偏差値はそれなりにあったし、その頃の俺なら十分受かれる場所だった。

だが高校に入ってから身の入らない生活が始まってしまふ。

一年のある日、クラスのみんなどは当たり前障りのない関係を目指していき、その通りになっただころ、テストの返却をしていたときだ。

目に飛び込んできたのは中学では見たことない数字。

返却されて自席へ戻ろうと重い足を動かした時、ひとりの男子と目が合った。

そいつは俺の点数が見えたのかは知らないが、苦笑いを浮かべるとゆっくりと点数を露わにした。同じ点数だった。

それから度々そいつと話すことが多くなった。他愛の無い話ではあったが楽しかった。

その時やつと思いついた。この感覚に。

隣に誰かいるという感覚。

中学からこれと言って親友と呼べる奴なんて一人もいなかった俺からすると、そいつは親友のようにも思えた。

そいつは俺だけでなく、でかい二人の男やら小さい女子やらイケメンの先輩やら。友達が多い。

そいつには友達がいる。友達と一緒にいるときのそいつは幸せそうだった。

それから後見人の人には自分で生活出来るからといって自宅へと帰ってもらい、自分一人で生活するようになった。

狭い狭い家で一人になってふと思いついた。

それが母さんから貰った、生活費を削ってまで俺のために買ってくれたシャープペンシルだった。

俺からすると色々な思い出が詰まっているその一本のペンを探すこと。

まずそんなことから道を見つけようと思った。

長い間探したような気がする。同じ所だつて何回も何回も探した。ないことが分かっても探した。

何かこの世界の歯車が狂って、すぐに見つからないか。そんな無駄な希望さえも抱いた。

見つかるわけがない。俺はやっぱり助けを求めるしかなかったんだ。そいつに。

小宮山明人に。

奇跡のシャープペンシル

「全体的に纏めようと思う」

放課後。そんなこと切り出してみた。

孝介は用事だかなんだか、今日の傘部には参加できないらしい。永本君は早々に帰宅。

仕様が無いので、僕が珍しく孝介になりきろうと思った次第だ。

「物心が付く前に父親が雲隠れ、そして中学卒業間際に母親を亡くし、後見人の下育った。現在一人暮らし」

永本君の過去は大体理解できたと思う。

最後、母親の墓の前で堂々と座り込んだことには驚いた。

何かを諦めたかのような、何かを悟ったかのような、そんな顔をしていたから。

「けどよ、問題はシャープペンがどこにあるかだろ？」

一輝が口を挟んできた。

正直、僕だつてこんな情報必要なか不安ではあったが、永本君の家から後見人の資料が出てきたときに感じるものがあつたのだ。

これはただで済まないかもしれない、と。

「何か繋がるかもしれないじゃない」

「そうだ。でも、お前みたいなゲス犬には分からないかもしれない」

「んだとお愛理い!？」

愛理の言葉に反応した一輝は勢いよく席を立ち上がった。

「何でケンカが始まるの!？」

久しぶりに一輝の目の色が変わった。これはケンカが始まる合図だ。

相当『ゲス犬』が嫌だったらしい。

落ち込むのを通り越し、ついに激怒するまでに至ったのか。

一方の愛理は、明らかに自分が悪いのに逆にイライラしていた。もうなんだか矛盾だらけ。

この二人の間ではすぐケンカが始まってしまふ。どうでもいい理由で。

「ゲス犬に負けたらおめえはただの犬だこのやろおお!!」

それ、なんかマシになってない？

「うるっさい！ゲス犬はゲスなりに大人しくしてる！」

こんなケンカは昔からよくあって、それをずっと見てきた僕だから分かってきたことがある。

それは、年々激しさを増していることだ。

「ちよ、ちよつとやめてよ！」

勿論、僕の言葉なんかで止まるはずがない。

放課後の教室。損害が出ないように祈った。

一般常識として考えてほしい。

か弱い女の子がいい年になってきた男子に普通は勝てない。絶対に。

しかし、『愛理』と『一輝』においてはそんな一般常識は通用しない。

今まで数々の戦いを繰り広げた二人だが、一輝が愛理を熨したことは一度もないのだ。

だから、と言っては十分すぎるくらい理由づけだが。今回も愛理の勝利に終わっていた。

「一輝ってさ、いつもどんな戦い方してるの…？」

毎度毎度ズタズタになって座り込んでいる一輝を見て、思わず同情の気持ちがあふれ出る。

「けッ…！んなもん最初に色々なポーズを取るだろうが」

いやいや、そんなことを言われても。…ポーズって何？

「『寒がる虎のポーズ』だ」

「弱そうだね、それ」

「っていうか戦いにポーズって…何？」

「カイロをな、ブレザーの胸ポケットに…ってアラ？」

「一輝が胸の位置に手をあてていたが、どうやらなくしたらしい。」

「ああ、あつたあつた。こんなところに飛んでつちまったか」

「ゆっくりと立ち上がると、千鳥足で落ちていたカイロを拾いに行く。」

「結構な距離だった。教室の端っこまで飛んで行っていた。」

「そんなに激しくケンカをして…。」

「激しくケンカを…して…？」

「常識に考えると、何か激しい動きをしたときに落ちそうだな」

「あれは運が悪かった。病院へ駆けつけたら暴れちまったよ」

「ああ、あつたあつた。こんなところに飛んでつちまったか」

「頭の中で考えが煮詰まる。」

「もしかしたら、という考えがまた浮上してきたのだ。」

「ありがと！一輝！」

「はあ？…まあ、気にすんなよ」

「戸惑いながら返事が返ってくる。何気にどや顔。」

「ちよつと行つてくるよ！」

もしかしたらという気持ちで僕を駆り立てる。

「明人！」

後ろから愛理が着いてきていた。

「私もいく！」

「…ああ！」

目的地は決まっている。

永本君のお母さんが亡くなった場所。

病院だ。

後になつて冷静に考えてみると、あまり走る意味は無かつたらしい。

「つ明人……はあ…走る…意味、あつたのか…？」

「はあ…はあ…無かつたね…」

相当気焦っていたらしく、永本君の家まで全力で走ってしまった。

途中で愛理が着いてこれなくなるほどに。

永本君の家が近くて良かったと、よく分からない安堵感すらあつた。

「つたく…何事だ？」

そりゃ永本君の対応もこんな感じになる。

驚きと、呆れも含んでいた様子。

「来てほしい所があるんだ。永本君」

「そつか、ちよつと待つてろ」

走っていて急に止まっても汗は出ない、後からじわじわと己の体から噴き出してくるものだ。

永本君の準備が整って今から病院へ、という頃合いには僕は汗があふれ出していた。

汗というものも、全くとどまることを知らない。

「どうしたんだ？すごい汗だぞ」

愛理がそう訪ねてきて思った。愛理自信は全く汗をかいてないこ

と」。

「まあね、それほどでも」

「いや、褒めてないぞ」

本題に戻る。

はつきり言つて、探しているものが見つかるかは分からない。

病院へ何故向かうのかは勿論、病院にあると踏んだからだ。

『永本君は病院で暴れたその時に落ちてしまい、そのまま拾い忘れて帰った』

これが僕の予想だ。

とはいつても全く確証なんてものは無いし、もし仮に病院の方で『落し物』として拾われたとしても、一年以上も前の落し物をずつと保管してあるだろうか。

実際には本当に道端で落としたかも知れない。

しかし、その他の場所とすると、もうそこしか僕の頭では考えられない。

「…病院にあるのか？」

「いや、ただの予想だよ。確信した訳じゃない」

永本君にはそう返すことしかできなかった。

だけど、そう返事をして永本君の表情は変わることは無い。

いつも通り。読み切れない表情をしていた。

『病院』という単語を聞いてもひとつも表情を変えない。

「明人、明人」

小声でそう僕を呼び掛けたのは愛理。袖を引っ張ってきた。

小声で話しかけたのだから恐らく永本君に聞かれたくないんだろ
う。

僕は僅かに耳を傾けた。

「あそこにいるの…孝介だぞ」

少し先の病院を指を指す。

「えっ!？」

「どうした」

即座に永本君に訊かれてしまったぞ。

というかそれどころではない。本当に入口には孝介がいた。

自動ドアの目の前に仁王立ちしているため、ドア自体がりのままの機能を發揮して、開いたり閉ったりを繰り返していた。そこに立っていると邪魔だということに気が付いてほしい。

それにしても、なんで孝介がこんな場所に？

「いや、あそこの入口にいる人見てよ」

「ん…？あれは、篠原さんか？」

入口の真ん前まで行くと謎が解けた。

正真正銘の孝介がそこにはいた。

「孝介ですよ？」

「ああ。紛れもなく」

何故か敬語で問うてしまう。

「随分と遅かったな」

孝介が笑顔で言ったその一言で全てが分かった。

それと同時に、『病院』という僕の予想は正解だったらしい。

孝介はもう分かっていたんだろう。

孝介の言うことは正しい。今も昔も。ずっと。

だから僕は自信を持って言える。

永本君のシャープペンシルはここにあるんだ、と。

「だがな。明人、問題があることは分かってるな？」

「うん」

孝介が訪ねてきた『問題』。それが一年以上も前の落とし物を病院が管理しているかということだ。

ナースステーションでそのことを訊いてみると。

「一年以上のものは……一応確認してみます」

といい、恐らく落とし物を集めてあるのであろう奥の部屋へと消え

ていく。

もう遠まわしに『無いですよそんな昔のもの』と言ったも同然の言い方が脳裏に残ってならない。

逆に、確認しに行ってももらえただけでも相当親切に感じた。

「本当にここなのか？」

永本君の台詞が僕の耳を伝う。

「確信は」

「ある」

僕が言い終わる前に孝介が割り込んできてそう言い放った。

『少しは自信を持ったらどうだ？』

そう孝介に言われた時のことを思い出す。

自信を持つとうにも、どうも心のどこかで不安に思っている自分がいるのだ。

100%という確証が無い限り僕は決定づけることはできない。

そんな判断力は僕には備え付けられていないんだ。きっとそう。

「何ですか」

「ここにあるからだ」

「よくそうやって言いきれますね」

「俺があるつつつたらあるんだよ」

まあそんな変な絶対的自信も空しく、看護師さんが戻ってくるなり僕の予想通りだった。

「どうすんだよ明人…」

「僕は絶対あるなんて言っていないからね」

ナースステーションの前でただ立ち尽くす高校生4人。

そのすぐ隣を颯爽と看護師が通り過ぎていく。

僕たちの方へは見向きもせず早足だった。

「どーすんだよ明人お」

「他人事みたいに言わないで！」

何でだ？孝介があると云ったらあるはずなのに。

僕にとっての『絶対的な孝介』は昔だけだったのか？

気分が悪くなるほどまでの孝介の自信。

それはそれは恐ろしいほどまでの『強運』を孝介は持っている。

何の根拠があるわけでもない。ただそう信じるだけ。

なのにも孝介は正しい。

賭け事においては無敵だったことを覚えている。

ルーレットや麻雀などで勝ったことが無い。誰も。

だから今回も絶対にここの病院にあるはずなんだ。

「何で無いんだ…？」

誰にも聞こえない音量で呟いた時だった。

「君、もしかして…」

聞き覚えのない声がした。

若い成人男性、といった感じだろう。

全員がその声の方へ振り向く。

そこには。

「…大宮先生」

返事をしたのは僕でも孝介でも、ましてや愛理でもない、永本君だった。

大宮先生と呼ばれたその人は永本君を懐かしいような眼差しで見つめていた。

「永本君、この人は？」

「大宮先生だ。母さんの手術を担当してくださった方だ」

「え…」

…ということは、永本君のお母さんを救えなかった人。ということでもあるんだよね。

確か永本君は手術後暴れたとか言ってたはず。

こんな普通にご対面して大丈夫なのだろうか…。

でもこの落ち着きようと丁寧な言葉からすると、今はそれほど怒

って無いのかな。

僕の心配はどこへやら。

大宮先生は休憩の合間を縫って僕たちを部屋へ案内してくれた。

「やっと…来てくれたんだね」

「中々来る用がありませんでしたから」

話は軽快に弾んだ。意外にも重苦しい空気ではない。

「どういう展開だ？」

「っ！！」

愛理が耳元で話しかけてくる。

一瞬、甘い香りに頭が熱くなるという男の神秘的現象に襲われながらも、必死に僕も耳打ちをした。

「い、いつからそんなに魅力的になったの？」

「しまった！間違えたー！！」

愛理に『はあ？』とでも言いたそうな顔をされる。

僕は何て意味のわからない返しをしてしまったんだ、僕は。

【By Nagamoto】

先生は二年前と比べると痩せていた。

それは仕事のせいかな俺のせいかなは定かではないが。

「やっと…来てくれたんだね」

大宮先生は母さんの手術の担当者。

医療ミス。要するに手術ミスをしたのがこの人だ。

母さんがそうして亡くなった後、大宮先生からは頻繁に手紙を受け取った。

とは言ってもまともに手紙を見れるようになったのは小宮山と出会ってから。

それまでは受け取っても中身を見る前に破り捨てていた。

最初に見た時はもう50通目くらいになるうとしていたとき。

内容はただひたすら反省の意。俺と、母さんに対する。

長い文章だった。それが50通近くも送られてきたと思うと、逆に慈悲の気持ちさえ出てきた。

それから手紙を送り返し、もう送ってこないように告げた。

先生から送られてきた手紙の内容には度々、病院に会いに来てくれるよう書かれており。

「中々来る用がありませんでしたから」

そう言うてはみたが、勿論これは嘘だ。

ただ今更会いに行くのが嫌だっただけ。何故か恐怖心を抱いていた。

俺のせいで病んでいるかもしれない先生に会いに行くことが辛かった。

「僕ね。結構有名な医師になったんだよ」

「たった一年ですか？」

驚きの話だ。

母さんの手術をした時はそれほど、というか全くと言っていいほど知名度は無かったはずなのに。

当時。担当の医師の名前を特別聞いたことがあるとは思わなかった。

「一応、手術を失敗した身だけど、僕はそれ以来ミスはしたことがない。全て成功しているんだ」

ほう。そりゃあ知名度は上がってくるか。

「すごいですね」

お世辞でもない素直な感想に、何とも言えない笑みを浮かべた先生。

「まあ、君のお陰だよ」

「はい？」

「もっと早くに病院にいられたら、僕は多分、医師を辞めていたよ」

「どういうことだ？さっぱり分からん。」

「早くに来ようが来まいが、どっち道有名になっただろうに。」

「君はすごい力を持つてるよ」

「今度突然なんだ？余計、訳分からなくなる。」

「いや、そんなに無いんじゃないですかね……」

「そんなこと無いよ。君のお母さんはとてつもない奇跡を持っている」

「俺の、母さんが奇跡？」

「何かなんだ？」

大宮先生は白衣の胸ポケットであろう場所からあるものを取り出した。

それを理解するには少し時間がかかった。

しかし少し経てばすぐに思い出した。

見たことがある形。

シャープペンシルだった。

それは振れば芯が出てくるだろう。

それは持つ所が柔らかいのだろう。

俺がずっとずっと探していたシャープペンシルだった。

…か、あさん

「私はあの日、このペンを拾ってね。すぐ君のだと分かったよ」

マジか

「このペンを返して医師を辞めよう。そう思ったんだ」

やっと、…やっとだ

「でも君が来ないんだ。僕はこのペンを持つ限り医師を辞められない。辞めてはいけないと思った」

…そうか

「不思議に手術は成功するんだ。その時分かったんだ」

母さんは

「君のお母さんは奇跡を持っている」

…誰にでも優しいんだな

『望。お前にはコレをやるっ』

振れば、芯が出てくる。あの時のままじゃねえか。

『ほらほら見ろ！振ったら芯が出てくるんだぞ！？』
んなもんいくらでも売ってるんだよ。

『そうかい。行ってらっしゃい』

よく買えたな。少ない給料で。

俺のために。

ただ俺一人のために…。

「そ、つかあ…母さんは、そんなに…すごい人だったんだな」

くっそ。涙が止まんねえ。前が見えねえじゃねえか。

母さんの笑顔が俺の脳裏から離れてくれない。

一人で俺を立派に育ててくれた母さん。

俺の前では笑顔を絶やさない母さん。

俺のためにシャープペンシルを買ってくれた母さん。

「本当にありがとう、望君。僕は、これで、幸せだよ……」

先生も頭抱えて泣くなよ。

俺は母さんの子で良かった。

胸を張って言える。

そつと手を離す。

それでもお前は走り続けてくれる。

ほら、走れるんじゃないか。私なんかいなくても。

笑顔のまま、私の元から離れていく。

まともに地面も蹴れない足でも今は良い。

千鳥足だったとしてもいい。

ゴールすればいいんだよ。

母さん、ありがとう

ありがたいのはこっちだよ。

こんな立派な息子の母親だって。自慢出来るよ。

だから笑顔のままできてくれよ。

泣くこと何て許さないよ？男なんだから。

私は泣いてもいいんだよ。

ほら、だからすごい泣いてるよ、私。

今だって、涙で目の前がぼやけてしょうがないんだ。

お前を見届けないといけないのにね。

私の息子で、ありがとうね

私の元からお前は消えていく。

でもそれは終わりじゃない。始まりってことだ。
決して振り向くんじゃないよ。

前を向き続けなさい。望。

「俺は一人でも生きてくよ。母さん」

恐怖の姉、純白な妹

僕はある男が一人走っていく姿を夢で見た。

千鳥足のような気もしたが、それでも確実に前へと進んでいた。

あ。『一人』という表現は間違っていたかもしれない。

正しくは『二人』。多分そうだったはず。

男が進んでいったのは明日。

それはそれは、明るい未来が待っていそうな明日だった。

僕はこれで良かったんだ。

少なくとも役には立ったと思う。

一つの親子の出来事。共感できるところもあり、重なることもあった。

彼はこれから幸せにやっていけるだろう。

胸ポケットに差してあるシャープペンシルを見れば解る。

「なあ明人。幸せって信じるか？」

いつもの放課後。一輝がまたそう切り出した。

「前も言ってたけど、気持ち悪いよー！」

本当に気持ちが悪かったので思い切り言ってしまった。

「んだよその顔は」

17年史上で26番目くらいにいい笑顔を見せたのにヘッドロックを喰らった。

「ぬうあああー…」

「こいつら馬鹿か」

「いや、愛理。ここまでくると『あからさま馬鹿』だ」

「そうか。こいつらはあからさまに馬鹿なのか」

愛理と孝介が絞められる僕を眺めていた。

「な…納得しないでよ…！」

外からは運動部達の声が聞こえてくる。

野球、ラグビー、テニス…。様々な部活動が汗をかき、青春を謳歌していた。

なのに僕は何をしているんだろう。

何気ない日々を送っていつて、青春なんか謳歌したことがない。

まあ、孝介たちといると必然的にそうなるんだろうけど。

「一輝、ホモごっこはそれくらいにしておけ」

「誰がホモだ！ナルシスト！」

「だから、まだ半人前だと言ってるだろ？」

『まだ』って何！？一人前になっちゃダメ！ゼツタイ！

しかし、そのナルシストもとい孝介のお陰で僕は一輝の腕から解放されることとなった。

孝介が教卓の前に座ると、前の席に僕と愛理と一輝の三人がいた。

まだ三人。あと一人、足りないんだ。

「さて。事件は解決したが、まだ願い事はこんなにある」

教卓に大量の紙切れを入れた袋が置かれる。

『キミの願い…叶えてしんぜよう！by篠原BOX』…だったか？

そんな感じの箱には相変わらず溢れんばかりの紙切れが大量に押し込まれていた。

「だが、問題があつてだなー…」

もうなんか大体分かる。

「愛理。これから俺の質問に何かしらの対応をしてくれ」

「うん、わかった」

まともな依頼をする奴なんてまずいない。

永本君が特例だったただけだ。

「食堂にイカスミ杏仁が無いなんて怪しいと思います」

「その前にまずお前の味覚を疑え」

「フリマにブルマを販売するのはどうですか」

「何のフリマだ！」

「メロンとキュウリって瓜二つなんじゃないかぼっちゃ？」

「色々やややししいんじゃ！」

「食堂でかき氷（鷹の爪味）が発売されないなんて…ようやく怪しくなってきましたね」

「いやだからお前の味覚を疑え！」

「何故、俺は格好いいんだ…？」

「それお前だろ」

「そこだけ冷めるな」

傍から見なくても奇妙な二人のやり取りを聴いているだけでBOX状況はひどい有様ということが判った。

愛理、お疲れ様。僕の掛けてやれる言葉はそれだけだ。

「とまあ、こんな感じなんだ」

「早々に傘部は廃部だな」

縁起でもないことをさらっと愛理が言い放った。

でもあり得ない話ではないから困る。

「だからもう逆にランダムでいこうと思う」

一つ紙切れを取って見てみたがやはりまともな依頼は無い。

その中から選ぼうというのかこの男は。

というか『逆に』の意味が解らない。

「そんなこんなで…呼ばれてないけどジャジャジャーン」

孝介の足もとから又もやBOXが登場した。

出来ることなら、呼ばれてないのに出てきて欲しくなかった。

「名付けて！『当探偵局は 皆様のご依頼によって成り立っておりますBOX』だ！」

どこかのローカル番組？つとか言う気分にもなれなかった。

「シャッフル、シャッFOOOO!!!」

孝介のこのテンションを蔑んで眺めることしか僕には出来なかった。

新しいBOXに紙切れが大量投下される。

箱から箱に移るその白い紙は雪崩のようにさえ思えた。

移す際に溢れ出た分は処分という形になる。

「さあ引け！ 明人！」

「何で僕が？」

「お前が新世界を切り開くんだよ…！」

恐らく適当になったんだろう。代表として僕が引くことになった。

愛理、一輝の表情を見ても、全然反対する気配を見せない。一輝

に至っては放心状態だった。

「反対意見は無いようだね…、何が起きても知らないよ…！」

もう無茶くちやだった。自分でもよく分からない台詞を吐くと、

愛理が『しまった』と言わんばかりの顔をした。

はっはっは！ いい気味だ！

…もう、どうかしてるや。

さて。結論から言うととんでもない物を引いてしまったのかもしれない。

「どれ、見せてみる」

孝介に引いた紙切れを押収される。

『私の妹は可愛いに決まってるのよ』

本当にそう書かれていただけだった。…いや、それだけというのは間違っている。

「高濱… 志織だとお！？」

丁寧に氏名まで記入されていた。

『高濱志織』。

孝介のことを忌み嫌い、孝介自信も苦手としている。

孝介とは同年代、所謂僕たちの一つ年上に当たる方。

一つ下には妹の志恩がいて確か隣のクラスだったか。

有名な話で、相当なシスコンということを目にしたことがある。

まだ本人が書いたとは特定できていないので、この紙切れは本物がどうかは解らない。

誰かが悪戯で書いた可能性も、

「この筆触：本物じゃねえか！」

あ、本物らしい。

筆触で分かるほど苦手なんだろう。

「男に二言は無いやな？」

にいつと意地悪い笑顔を浮かべる愛理。相当この状況が面白いらしい。愛理の笑顔（？）は久しぶりに見た。

「ちっ……。いや、しかし血は騒いで来てるぜ」

そもそも何故、高濱詩織が孝介のことを嫌いなのかが分からない。

昔っから嫌いだったような気もするし、つい最近嫌いになり始めたかもしれない。

どれだけ無邪気な表情の孝介でもふと高濱志織の話になるとトーンダウンする。

妹の志恩の方は一年生の時に同じクラスであったことから、結構親しい。

今は違うクラスということもあり、あまり話はしないけど……。

いい子だった印象が強い。

同級生なのに敬語を使い、常識があって美少女。告白も何度もされているらしい。

僕にとっては高嶺の花の存在であり、このままの関係を望んでいる始末だ。僕には無理無理。

次の日。早速、任務が遂行されることとなった。

しかし、何故か孝介が乗り込んでいったのは2・2。僕のクラスの隣だ。

「高濱。今日はお前に確認を取りに来た」

「私…ですか？」

放課後ということもあつて帰宅準備をしていた高濱『志恩』にとつては唐突であり、呆然としていた。

「ちよつと！孝介！何で妹の方なの！？」

「馬鹿野郎。ヒトは誰しも『慣れ』つてのが必要だろ」
「訳わかんないよ…」

高濱はぼんやりとただ立ち尽くしていた。何が起きているのか解らないのだろう。

僕だつてよく解っていない。

「孝介落ち着け。もう慣れたか？」

愛理が割つて入ってくる。

「俺は最初から大丈夫だ。問題無い」

「大丈夫なんだな」

「篠原あ？…私の妹に何のようなの？」

孝介が振り返ると、高濱『志織』の方がそこにはいた。

「まさか…私の可愛い妹に手を出すなんて野蛮な真似を…」

妹の方で慣れたのかは別として、何故か冷静な目で姉を見つめる。

「…何よ」

「ここで会つたが100年目。付き合ってください！」

「っ！なっ！？」

なんとということでしょう。

いきなり孝介が高濱志織に告白を？

孝介が高濱志織に会つたときは大概言い争いが勃発するはずなのに…。

高濱志織の表情は何とも言えない顔だった。少し恥ずかしいのか、顔が紅潮しているようにも見える。

「おおおう。どういう展開だこりゃ」

一輝も不思議そうな、気持ちの悪そうな顔をしている。

「私は…、私はアンタのこと…」

放課後ではあつたが、教室にはまだ少々の人数は残っている。

視線は孝介に釘付け。中には頭を抱えて絶望している女子もいた。
「だいっきらいよ!!」

うん。まあ多分そうだろうなとは思ったけど。

「ふふ…。ふはっはっはっは!!」

壊れたのか、孝介は急に高笑いし始めた。

「馬鹿かあお前はあ！俺がお前を好きになるとでもお!？」

うわあ…。この瞬間、孝介の男としての株が大暴落した。

何より、言い方が最低である。

「うぐう…!!」

「顔も赤くしちゃって、可愛いところあるんだな」

「いやああ!!」

どうやら言い争いどころか、内戦が勃発してしまったようだ。

拳や蹴りが目の前を行き来する。

「ごめんね。高濱」

「ううん！全然大丈夫ですよっ」

とりあえず高濱に謝っておく。勿論、妹の方に。

姉の方は交戦中なので、今後謝っておくことにしよう。

…ん？何で僕が謝ることになってるんだ？

「それで私に何の用だったんですか？」

「いや、ホントはお姉さんの方にあっただ」

「ああ、いつものやつですか」

ふふふと可愛らしげに笑う。

孝介は姉に会うたびにしばしば交戦を持ちかける。

でも、姉の方からも吹っかけてくる場合もあり、何というか、どっ

ちもどっちというか…。

「あー…明人くんごめんなさい」

「え？」

「お姉ちゃんも悪い時もありますし、その度に明人くん迷惑かけるし…」

本当妹はいい子だなあ。これっぽちも悪いことをしていないのに、寧ろ巻き込まれているだけなのに謝るといふ妹の精神は見習わなければいけない。

「いやいや、問題ないよ」

出来る限りの笑顔で答えてみた。

癒しの空間を堪能していると、愛理に制服の裾を引っ張られる。

「行くぞ。明人」

孝介は置いていくようだ。僕もその方がいいと思う。

「そうだね。じゃあまた」

「はい。失礼します」

名残惜しい所もあるが、高濱も下校しようとしていたのだ。これ以上引きとめる理由も無い。

相変わらず孝介と姉は交戦を続けているわけで、ここは僕たちも引き上げるのが賢明だ。

「じゃあね、孝介」

「おい！俺を置いていくな！」

姉のローキックをよけながら訴えかけてきた。

少々心痛いところはあったけど、まあここは仕方ない。

「じゃあね、お姉ちゃん」

「え、ちよ…！待ちなさいよ！」

妹の方も置いていくようだった。

…でもちよつと気になる。

僕と妹の高濱志恩と同じクラスになったのはちょうど一年前の一年の頃。

その頃から姉が帰りを迎えに来るほどベツタリだったかというところ、多分そうでなかったような。

曖昧な記憶だけに断定はできないけど、最近になってよく隣のクラスに姉の高濱志織を見かけるようになった。

それに、今の顔…。

先ほどまで僕に見せていた弾ける程の笑顔が失せていた。

「志恩ー！」

姉の叫びも空しく、妹は背を向けて遠ざかっていくのであった。

「明人。高濱志恩が好きなのか？」

「ぶうつ！」

愛理が突然にもそんな幻想的なことを言うんもんだからそれは大層仰天した。

休憩がてらに飲んでいたお茶を嘔き出しそうになる。

「な、なんでさ…」

「顔がゆるゆるだ」

そんなに緩んでいたのかな…。確かに癒しの一時ではあったけど。高濱が彼女になればって想像しようとするけど、あまりにも似合わないののでやめておくことにした。

「つたく、頭の中はまだ春だな」

嫌味を含んだ言い方をするのは一輝。

ただ、一輝だけには言われたくない一言だった。

「よく言うよ」

頭が悪いというのは勿論のこと、一輝にも女子の匂いがあるのだ。「へっ。あいつはちげーよ」

と言いつつもドヤ顔。素直にやめてほしい。

一輝が言う『あいつ』とは、…僕もよく分からないんだけど、『さざなみ』と一輝が呼んでいたのを聞いたことがある。漢字で書く『漣』、『小波』と言ったところだろうか。

身長はとても小さく、たまに一輝の左肩に乗っている。謎の多すぎる人物。

一輝のことを『隊長』と呼んでいたり、『倅』や『先輩』などとも呼んでいた。

一つ下の一年生ということと、どうも訳が分からないテンションの持ち主だったのを覚えている。

僕もまだ数回しか目にしたことが無いし、何とも言えない。

「あの子何て名前なの？」

「さざなみだよ」

「上の名前は？」

「うーん…、うーん…」

もしかして分からないのか。肩に乗っけておきながら。

「こいつの記憶力が無いだけだろ」

横から愛理の矢のような言葉がかけられる。

「うるせえ！何だ！？やんのか！？」

何故そついう発想になるのかはもう理解できない。

でも愛理となので心配する必要はないみたいだ。

「貴様ら。篠原兄を置いていくとはいいい度胸しているじゃねえか！」
と声を張り上げて孝介が入ってきたときには一輝はポロポロにな
っていた。

荒いような繊細なような

いつもの放課後。僕は三年生の居る階へと向かった。

流石に二年以上も見なれた顔と一緒にいるためなのか、僕がすれ違うたびに眉間にしわを寄せてくる。

二年生がここに来ると違和感を覚えるようだ。

「何よ。確かあなた―…篠原の手先ね！」

「小宮山です」

僕はそんな見方をされていたのか。

僕のクラスより一つ上の階が三年生だ。

正直、何クラス編成とかも知らなかったから、今初めて知った。

5クラス編成らしい。

孝介は1組、高濱志織は5組であるため、日々日常交戦されることはないようだ。

今日はこの何クラスで成り立っているかもわからないこの三年生の階に何用なのか。

それは、一応孝介の悪事を謝っておこうという高濱志織に似た思想の為にだ。

「昨日は孝介が変なことをしてしまってますいませんでした」

「…何でアンタが謝ってんのよ？」

「ぼかんとした顔で見つめてくる。」

「いやもうホント何でなんですか？」

「私に訊かないでよ」

それはそうか。

僕が高濱志織に謝りに来たというのもココへ来た一つの理由だ。

しかし、もう一つ気になったことがあってここへやってきた。

「あのー、少し時間いいですか？」

「えー志恩のどこ行かないと」

この人、本当に妹のことしか頭に無いのか。

「妹さんも関係する話です」

「…っ！！志恩はあげないわよ！！」

「……」

…あー面倒くさい…。

約まるどころ。姉の方は妹と違いとても面倒で、とても説得に時間がかかった。

「高濱さん。…甘いもの好きですか？」

「好きよ！めっちゃ好きよ！愛してるわ！」

甘味処で奢るといふ約束をして、ようやく連れ出すことができたのだ。

僕がここまでして話が出なかった理由。

それはあの手紙と、妹、志恩の表情に引っ掛かったからだ。

今思い出すだけでも鳥肌が立ってきてしまう。

恐怖さえ感じる無の表情だった。

あの手紙が本当だとしたらまず訳を知りたい。ただの冗談で入れたのか。

でも冗談だとしても氏名まで書く必要があるのか。

…いや、この人なら書きそうだけど…。

「あの高濱さん」

対面の席では、僕の野口が一人いなくなるほどのチョコパフェを目の前にし満悦していた。

「んあい？」

美味しそうに頬張りながらそう一言。

当然、何言ってるか分からない。

「ちゃんと聞いてもらえますか」

「ん」

真剣な顔を察してくれたのか、スプーンをテーブルに置いてくれた。こういうことは空気の読める人らしい。

店内は外との気温差が激しく、寒いくらいに感じる。お陰でチヨコパフェは中々溶けそうにないな。とか取りとめもないことを考えてみた。

「えっとー、高濱さんはあの意味不明な箱に手紙書きました？」

「あーええ、書いたわよ」

これはやっぱり事実だったのか。

それより筆触まで分かる孝介って一体…。

「その紙なんですけど、…真剣に書きました？」

「もちろんよ！だって私の妹は可愛いでしょ？」

そんなことじゃないはずだ。そんなことだけで忌み嫌っている孝介の怪しげな箱に手紙を書くのか。

「わざわざ何故そんなことを？」

「何でって…そりゃあ」

「そりゃあ？」

「うう…な、何よ」

これは何かあるのかな。

僕がそう言っている、感じがする。感じがするだけ。

「ホントは孝介にでも相談したいくらいのことがあるんじゃないんですか？」

「そ、そんなこと…」

もう視線があちこちいつている。偶に僕と目が合ったかと思うとチヨコパフェに目をやり、口をぱくぱくさせる。

この人は相当嘘をつくのが下手らしい。すぐ顔に出る。

こういう面は可愛いなと素直に思った。

「今なら、僕が聞いてあげますけど」

「…ふんっ！て、手先の…くせに…」

最後の方は消えかかっているのか分からないくらいだった。

「だから小宮山です」
さて。一体どんな相談なのか。もう大体どんなことなのかは予想できる。

高濱志恩のことなのだろう。

「で、どんな悩みですか？」

出来る限り優しい語りかけで尋ねてみた。

「志恩がね……」

「……やっぱり」

小声で言ったはずが聞こえてしまったのかは分からないけど、する様な目で睨みつけられる。

「う、うええー!!」

そんな奇声を発したかと思うと、僕の隣までやってきて。

「志織が振り向いてくれないのよおー!!」

泣きながら抱きついてきた。

勿論、夕方にもなっていない時刻の甘味処にはお客様がいらっしやる。

物凄い痛い視線を浴びせられることになってしまった。

「な、なな、なななにしてくんで」

そして僕動揺。

その時の呂律の回らなさには自分でも驚いた。こんなにも舌が回らないものなのかと。

「さつきはその……取り乱してごめん」

「い、いいですよ」

思わず相手に判るくらいの作り笑顔をしてしまう。

結局、野口を犠牲にしてまで出てきたチョコパフェまで食べきれることが出来なかった。

あの後すぐに飛び出してしまったのだ。

せめて半分くらい食べてもらってから話を切り出すべきだったと今頃後悔している。

「あの、高濱さん」

「高濱と高濱でややこしいでしょ？ 私は志織でいいわよ」

言われてみれば高濱のことを高濱と呼んでいるし、高濱さんのことは高濱さんと呼んでいて、って言うてたら訳分からなくなっただぞ。

「志織さん、ですか」

「何よ、不服なの？」

「学校で呼びにくいです」

あの違和感の空気の中で『志織さん！』と呼びだしている僕を想像する。

すると何故か学園が終わってしまうような気がしてきた。

「それじゃ、今風に『オリシー』でいいわ」

「本当にいいんですね？」

「…っ…ごめん」

少し呼ばれる姿を考えたのだろうか、即答だった。

「まあ…志織さんで頑張ってみます」

僕が慣れていけないと駄目だな。

「それで志織さん」

「何？」

「一応、連絡兼相談用としてメールアドレスを」

直接話せないようなことも携帯では話せてしまふ。携帯と言うものは不思議な機械だ。

後になって考えてみて、『何であんま内容のメールを送ったのだろう』と後悔した人も少なくは無いだらう。

「そうね」

送られてきたメールアドレスを拝見してみた。

その中には『1105-s-0921-s』とあった。

恐らく志織か志恩の誕生日が、11月5日か9月21日なのだろう。とても判りやすい。

それより、自分のメールアドレスまで妹のことを考えるなんて…。

結構重度なやつなのかもしれない。

少し身震いすら覚えた。

「携帯は肌身離さずに持つてるからいつでも相談してきなさい」

「一文字も変えずにそのままお返しします」

物理という授業は一種の恐怖だ。

次から次へと公式が出てくる。

一輝はもう必然的であるかのように目を閉じていた。

僕はまだ諦めきれないのか、何のために目を開けているのか自問自答したくなる。

しかしやっつてはいけないのだろう。

何故かって？

勿論。卒業が危ないからです。

「明人。高濱志織が好きなのか？」

「あれ、何かのデジャヴ？」

愛理が教室でそんなことを言い始めたのだから驚く。

しかしよく聴くと『志恩』ではなく『志織』に変わっていた。

「って、何でお姉さんの方？」

「惚けなくったっていい。証拠だってあるんだぞ」

教室では携帯電話の電源をOFFにないといけなにも拘らず、明るいバックライトが点いているスマートフォン画面を見せつけられた。

そこには硬直している僕に抱きついてしている志織さんの……ってええええええ！！

「な、なな、なななにしてんで」

「舌回って無いぞ。因みにこの写真は写真部のある方から拝領させて頂いた」

ウチの学校の写真部には幽霊部員が1人いる。篠原孝介だ。

因みに写真部の部員数は全部で73人。

高校野球の強豪校にも匹敵するほどの数の裏には一人の男の影があるから。

孝介が幽霊部員になるもんだから、その73人の内の70人が幽霊部員になっただって噂だ。

「全くもって…迷惑な話だ」

「なあ、好きなのか？」

「いや全然」

自分でもびっくりするくらいの即答だった。

「新聞部に売りつけるぞ」

「別にいいよ」

新聞部が新聞の発行、校内に貼り付ける為には生徒会の許可が必要だ。

僕の恋愛スクープなんて許可されるはずがない。

「うううー、つまらないぞ…」

それを分かっていたのか、僕がつまらなく感じていた。

少し頬を膨らませて拗ねる姿は可愛すぎて堪らなかった。…って何言ってるんだ僕は。

「たまに見せる魅力は一体何なの？」

「しまった！間違えたー！！」

「は？」

また心の声が出てしまった。

「何だ何だ、愛理、何持ってたんだよ」

「高濱姉と明人のいちやいちゃシーン」

「僕のこの姿を見てそう答えられる愛理が羨ましいよ」

僕たちが会話しているとほいほいやってきた一輝は、こっちに来るなり愛理の携帯を覗き込んだ。

「おうおう、年上好きはわからないでもねえけど、年上と言ってもコレはないだろ」

「確かにコレは無いな」

気づいたら翔平も集まっていた。どうやらみんなして志織さんは

無理らしい。

「ほら、年上好き評論家の篠原翔平さんもそう仰ってるぞ」

「誰がそんなこと言った」

「俺が年上好きってこと話したら食いついていたじゃねえか」

性格がどうとか髪型がどうとか色々と話が僕の目の前で飛び交っていた。

10分間の休み時間は孝介以外はこうやって集まっている、自然と僕の席に。

「一輝は年上好きな？」

「だ、誰が、んなこと言ったってんだよ！」

数秒前に言ったことも覚えていないのか…。

「明人。それはないぞ」

ちつつちつと人差し指を振る翔平。

「どういうこと？」

「ほら、あそこを見るんだ」

翔平が指差す先には、ちっこい女子が立っていた。例の『さざなみ』だ。

「あゝあ！さざなみ！」

何故か『しまった』という表情の一輝。

「軍曹ー！」

今日の一輝の呼ばれ方は軍曹らしい。

小さな手をぶんぶんと勢いよく振り回し、小さいながら元気よさげな少女だ。

一輝は僕たちに一言残さずに、さざなみの方へ向って言った。

「あいつはロリコンなんだよ」

奇妙な笑みを浮かべる翔平。

僕の周りには普通の笑みをする人はいないのか！

「にしても…すごい身長差だね」

一輝の身長は確か、いまいち信用できないけど本人曰く185cmだとか。

遠目で見ると限り50cmくらい身長差がありそうにも見える。

「明人もロリコンなのか？」

「なあっ!？」

愛理の規格外の究極の質問で吹いてしまった。

水分を口に含んでいなくて良かったと思いました。

「つて、いきなり何!？」

「小さい子が好きなのか？」

確かに小さい子は嫌いでは無い、かといって大きい人が嫌いかと言うとそうではない。

「明人が好きなのはあれだぞ。愛理みたいな輩だ」

翔平がこんな時に余計な一言を…!

「あ、明人は、私なんか…」

愛理もちよつと赤くならないで欲しい。

「そんなこと無いぞ?なあ、明人」

そして今シーズン最大の難関であろう、翔平からの強烈なフリ。

「へえ!?!ば、僕は…」

僕はどうなんだ?愛理が好きなのか?

確かに翌々考えてみれば最近の愛理の魅力は何か相当なものがある。

あの電車の件も思わず手を出しかけてしまったし…あの時は永本君がいなければ多分…。

「明人くん!」

「うわああああ!」

誰だ!?!僕のことを明人くんと呼ぶ人は!!

「わっ!びっくりした…」

よくよく考えてみるとこうやって僕を呼ぶ人は一人しかいない。

少し冷静に判断が出来た。

声のする方へ顔を向けると、そこには高濱志恩がいた。

廊下から見覚えのある本を掲げている。

「あ、あれ僕の辞書だ」

救いの神様現る。

「か、返してもらわないとなー！さて！つ次は移動教室かあ！」
この短い文章の間で二回声が裏返ったことから、相当な危機に直面していたことを解ってほしい。

次の科目である数学の用意を持ち、一目散に高濱の所へ向かう。

「…ちっ…」

途中、翔平の舌打ちが背後から聴こえた。

振り向いてはいけない。何か駄目なものを見てしまう。そんな気がした。

「明人くん、そんなに慌ててどうしました？」

「危うくどうにかなりそうだったよ」

僕が愛理を好き？考えたことも無かった。

愛理は小学校からの付き合いで、孝介らとずっと一緒に行動してきた。

そりゃ、たまにドキッとすることもあるけど…。

「大変でしたね…」

苦笑いをしてくれる高濱。

あの面子ということから、大方のことを想像してくれたのだろう。ありがたい。

「あ、そういえば明人くん」

「うん？」

「…あ、明人くんは、お姉ちゃんの彼氏なんですか？」

「…わー」

もうどうでもよくなってきた。みんなとんでもないことばかり言うから感覚が麻痺してきたじゃないか。

「そうなんですか…」

「違うからね」

優しく冷静に対応してはみたけど、信じてくれているのかは定かではない。

ずっと明後日の方向を向いていた。

僕らが通っているこの学校は県内でも有数の進学校であり、過去の実績も難関大学へ合格した生徒が何人もいるとか。

中学校の頃の僕を考えると到底受かるなんて幻想は想像していなかった。一輝の場合なんかもつと酷いのにな。

因みに僕と一輝と愛理の三人は同じ中学校だったが、孝介と翔平はぎりぎりの校区外だったために別の中学校だ。

中の下にすら近かった僕と一輝に声をかけたのは孝介だった。

『敢えてこそ上を目指すんだよ！』とか何とか。

その言葉のお陰でそれはもう猛勉強だった。

結局、校内ベスト5にランクインしていた愛理は除き、僕と一輝は必至のペンダゴを作る羽目になってしまった。

何が言いたいかというと。

勉強についていけない。数学が絶望的だ、ということ。

『小宮山です。確認のために送りました』

メールするための口実としてはこれがいいなと思った。

ベットに寝転がり、現実逃避する前に志織さんの悩みを探ることにした。もっと具体的に知ることが必要だ。

『志織が振り向いてくれないのよお！』

振り向いてくれない。

これはどういうことなのか。少しずつでいいから問い正していった方が良いと判断した。

「それにしても数学難しいなあ……」

今日の授業の復習を脳内でやってみただけ、全く思い出せないし理解出来なかった。

大体何なんだあのSを細長くしたやつは。上と下に数字が書いてあって…。

…つてか何で二年生なのに数？をやらないといけないのさ…！

最初の方は良かったよ…。

公式覚えるだけですすら出来ていたのに、いつの間にか応用まで重要になってきている。

何だよ三次関数つて！何だよ無限等比級数つて！何だよ微分積分つて！

もう訳わかんない！僕だつて好きでこの学校やってないよ！しかも理系に！

…そっぴや何で理系になったんだつたっけ…。

これじゃ俗に言う『なんちゃつて理系』じゃないか！

くそ…。でもそもそも、理系＝成績優秀という習慣・偏見・風習が間違つてるよ！

恐らくこの世の中には、頭が良くないのに理系だから頭いいと思われちゃうと言つて悩んでいる人だつて少なくないはずだ。

もう文系へ転向してやろうかと考えちゃうよ！数学このやるー！
「つてか返事遅くない!？」

か、考えすぎか…。

数学のことを考えていたらつい時間を忘れていた。

携帯の画面端に映る時間を見てみたけど、活発的でない高校生ですらまだまだ起きているであろう時間帯だ。

活発過ぎるあの人を考えると、後4時間は寝ないだろうという予想だ。

…いやでも意外と健康に気を使っていて早寝なのかな。

志織さんも案外そういう素敵な面があるのか？

高校生はお肌とか気になる年頃つていうことを孝介から聞いたことがある。

確かに肌が綺麗な女性は麗しき何かを秘めているような気もしないはっ！そう言えば愛理は昔っから早寝早起きをしているぞ…！

だから肌が綺麗で可愛いのか…。

ああもうまた何言つてるんだよ僕は！でも最近の愛理はおかしい

んだよ！綺麗なんだよ！

「ってだから遅くない!？」

あれやこれやと考えている内にもつかれこれ15分以上もかかっている。

「そうだ、お風呂なんだよ」

お風呂に入っているのなら納得だ。そうだよ、待てばいいだけじゃないか。

こういうところは前から待てないんだよね。

短気な所は直していかないと駄目だ。

そうやって納得しようとしていた僕に着信音が鳴った。

「お風呂じゃないの!？」

いやいや、待て待て。15分でお風呂を済ます女性なんてこの広いご時世にはたくさんいらっしやるじゃないか。

「そうだよ。志織さんはお風呂を10分で済ます人なんだよ」
気にしちゃダメだ。

肌身離さず携帯を持っているんだ。お風呂だお風呂。

『うん。メールはちゃんトドドいたよー宇』

…。
メール、初心者…？

届かない気持ち

恐らく昨日のメールの内容は『うん。メールはちゃんと届いたよー
う』なんだろう。

結局あのまま呆れて寝てしまったんだっただけ。

気がつけば気持ちがいいほどの朝日に浴びていたことを思い出す。

「明人ー」

「…あ」

愛理は数学が得意だ。

80点以下をとったところは一度も見ることが無い。

僕の中では『愛理』数学王』というアソシエーションが完成しつつある。

そんな数学王を朝一に見かけて気付いたのだ。

「数学の小テスト大丈夫か？」

「んはあああああ！！」

そういえばやってないよ僕！メールとかお肌とか愛理とか考えてる場合じゃなかったよ！

そうだよ！そもそも昨日何のために『それにしても数学難しいなあ…』とか呟いたんだ！

…今日の小テストのためじゃないか！

くそ、あまりのメールの返信の遅さに本題を忘れていたよ…。

「ど、どうした？」

今何時だ？

時計に目を向ける。

しかし無情にも時計は、8時20分、授業開始の10分前を告げていた。

まあ、時計に情があるわけ無いんだけど。

「愛理！数学は何時から！？」

そうじゃないか。一時限目じゃなかったら可能性はある。
内職。

それは本来受けるべきでない科目を授業中行うことを指す。
宿題であったり、予習であったり。

それを行う為には前の席ほど難易度が上がるとされており、前から
二列目までの内職はエキスパートと称され、讃えられている
どうやら今回は…内職を行うことになりそうだ。

僕の席は前から四列目。

…やるしかない！

「一時間目からだ」

終わったー…。

くそ…斯くなる上は！

「う、うう！お腹がいたいよ…！」

仮病作戦だ。

一人で勝手に保健室に行つてると『えー小宮山君あやしー』とか
思われるし、なんちゃって理系という地位に就く僕では『あいつ、
どうせ受けたくないだけだろ？』とか、核心を突かれたら大変だ。

「絶対出るであろう問題を教えてやるぞ？」

「教えてください。ごめんなさい」

一瞬で判断した。

愛理には大人しく従うことにしよう。

「ジューズ一本なっ」

そこには眩しいほどに輝ける笑顔があった。

僕は感じた。

これは、いける。と。

「こんなの出来レースじゃないか」

数学という長い長い一時間の間に思った素直な体験談だ。

みんな数学という科目の得点の特徴をご存じだろうか。

それは中位層が少ないということだ。
得意な人はとことん出来て、苦手な人は笑えるほどに出来ない。
出来る人は数学がほとんど面白くなって点が伸び、出来ない人は面白くなくなり、点が落ち、墮ちる。
これがなんちゃって理系を生み出す要因。
「デフレどころじゃないよ!…デッド!デッドスパイラルじゃないか!」

死だよ!死!

もう大声のせいでクラスの注目を盛大に浴びちゃってるけど気にならない。気になれない。

「明人よ、でも書けたんだろ?」

頭を抱える僕に一輝が僕の席に寄ってきた。

一輝は一体どうだったんだろう。テスト中は自分のことで必死だったから分からないぞ。

「え…?ま、まあ愛理に教えてもらったところは…」

愛理の予想は見事的中していた。3つ教えてもらった内の3つ共出題されていた。

まあでも10分では1つしか覚えられなかったけど。

小テストは全部で10問。9問撃沈したことになる。

「一問だけだけど…」

「ならいいじゃねえか…」

「ど、どういうこと…?」

一問で良いってことは…。

これは、最悪のケースに至ってしまったのか。

「俺なんかペン動きませんでしたあ!!」

「一輝っ…!!」

涙が出てくる。

1問も0問もほとんど変わらないというのに、これほどまでにも一輝に同情したことがあるだろうか、いや無い。

「明人、テストどうだった?って訊こうと思ったのに必要無いな」

愛理が哀れみの表情を浮かべながらこっちに来た。

「愛理……」

流石の愛理も慰めてくれるだろう。

な、慰めるって普通の慰めるだよ！？そ、それ以外に何かあるって言うんだい。慰めるって言ったら『残念だったね』とかいうやつで、決して『じゃあウチ来る？』的な流れ何かじゃ無いよ！

「明人、ジューズ」

「あ……」

…本当に、僕は何て過ちを。

小テストと呼ばれるこの数学のテスト。

これは名前の通りのテストではなく、中間テストまでの中間テストと思っいいい。

ばつちりと成績に反映されるテストなのだ。

僕と一輝はこのテストで撃沈した。もう思い残すことは無い。

昼休みをチャイムが告げた時、孝介が上からやってきた。

本当に上からやってきた。良い景色を見渡すことが可能な教室の窓から侵入していた。ロープを使っていたんだけど、そこまでして窓から入る意味が分からない。

クラス内からは悲鳴に近い声もあがっていた。

「ようお前たち。今日も孝介兄ちゃんがやってきたぞ」

「おい翔平。あれお前の兄貴だろ？何とかしてやってくれよ」

「ん？俺に兄など存在したのか？」

翔平に存在を否定されながら孝介はやってきた。

これで、みんなが揃った形になる。やっぱりこれがしつくりくる。つたく、そういう素直じゃないところ…嫌いじゃないぜ」

孝介はスルーされながらも恋々とはせず切り替えていた。

僕と一輝の席をくつつけてそこに5人が囲む。これが高校になつてから定着していた。

しかし、一般的に考えて机を2つ合わせても辺は4つしかない。ということはいち。5人の内2人はどうやっても1辺で共同で使用しなければならぬのだ。

「まあ、今日もパーとチヨキで分かれるぞ」

僕は平然を装って孝介の指示に従う。

装っているんだ。平然を。

「ちっぱでわかれんねーん」

愛理以外全員パー。

「ねーん」

仕切り直しの一回。また同じ。愛理以外全員パー。

さてどうする？ここでチヨキを出せば愛理と同じになるかもしれない。

「ねーん」

今度は僕だけチヨキで他のみんながパー。

「ねーん」

また同じ。

どうしよう、パーに変えるべきなのか。でも孝介たちがパーを出す以上チヨキでないと一緒になることはない。

「ねーん」

僕がチヨキのまましていると、愛理がチヨキを出した。

これで僕と愛理が1辺に二人……って、何でこんなに嬉しがっているんだ僕は。

「じゃあ一つは明人と愛理で使えよ」

『よし、残りの席を決めようじゃねえか』と一輝が腕を振り回しながらジャンケンをしていた。

もう残りは一人一席なんだからあまり意味は無いと思う。

本来、このチヨキとパーでペア席になった人は残念でしたと思うんだ。

そう、『残念』だと思わなければならない。

「愛理、隣だね」

全くもって残念だと思わないのは何でだろう？

いやー僕も運が良くなったもんだなー。愛理と席が隣になるなんて、

「…はあ…」

愛理はとつても残念そうだった。

何その溜息っ！？何か、全てご飯が通らなくなりそうだよ！もう食道なくなっちゃおうよ！

「あ、あの一…何か、ごめん？」

「あーいやー、まあ、うん」

何だその途切れ途切れな感じは？

そんな姿を目の当たりにしてしまった僕は、

「ジューズ…いる？」

小さな約束を果たすことくらいしか出来なかった。

その日の昼食は食べられないどころか、新記録を叩き出すかのような猛烈な速度で弁当を平らげてしまった。

このことを俗にやけ食いというとか何とか。

「潔く欠点を取っちゃおうか」

「さらっと縁起でもないこと言わないでよ」

一時間目から地獄を体験することに成功した僕は、そのあとの授業なんて身が入る訳が無かった。

昼休みの出来事も入り混じってしまい、昼からの授業はもつと酷かった。言うまでも無かるう。

そんな満身創痍の状態であっても、解決しなければいけない本題がある。

だからこうやって放課後に3・5の教室へお邪魔しに来たんだ。

…ん？なんで解決しなければ『いけない』んだ？

「ただ現実を口にしたまでです」

「一応、私受験生なのよ？」

「それは大変な失言を…」

ま、いいか。来たからには遂行しよう。

今回はどの程度高濱妹に嫌われているのかを検証するため、志織さんに手伝ってもらおうように頼みに来た。

「志織さん、今日はですね、妹さんに一緒に帰るように誘って下さい」

「え？そのつもりだけど」

「はいはい」

まあそんなこと解ってたけど念を押したんだってことを解ってほしい。

確か、高濱は帰りの支度をするのに結構遅かった印象がある。

大概の人はホームルームで配布されたプリント類はすぐに鞆へ仕舞ったりするけど、高濱の場合ホームルームで話されることを全て聴き終えてからやっと鞆に入れるのだ。

そんなこともあって、教室を出てくるのは丁度今頃と判断する。

「じゃあそろそろ来るから行ってくるわね」

「もう知ってたんですね」

ハイどうぞそろそろ来ますよ志織さん。なんて言う必要は無いよ
うだ。

…言いたかったな。

志織さんが階段を降り、僕たちの学年の階へ到着すると間もなくして高濱がやってきた。

本当にこの人は妹の全てを知り尽くしているのか。

「志織〜！」

「ああ、お姉ちゃん」

志織さんが引きとめに入る。

「うーん…」

高濱の方はというと、やっぱりまたこの前の時と同じ表情が出ていた。

無の表情。嬉しくも悲しくも無ければ、激怒も憎悪も無い。

「ごめんね。今日は塾があるんだ」

「うそ!? うーん… そうなの…」

まだ何も姉の方から話しかけていないのに、一方的に話が終了した。

姉は意外にもしつこく追い回す訳ではなく、妹を静かに見送っている。

遠くから見ていた僕は離れる高濱の背中が寂しいように感じた。

「よう! 高濱! まーた愛する妹に逃げられたのか?」

妹の遠ざかる背中を見つめる志織さんに一人の男子生徒が話しかける。

「うるっさいわねっ!」

どうやら高濱と一緒に帰れない志織さんを見てからかったのだろう。

志織さんが叩く素振りを見ると、その男子生徒は笑いながら去っていった。

「志織さん」

「…なによ…」

僕が話しかけると中々に不機嫌だった。本当に分かりやすい人だな…。

「ま、まあこういうこともありますよ、ね?」

「毎日こんなだけど…」

「っっ…」

そうあからさまに落ち込んでもらったら困る。

毎日こんなだって…? まずまずの重症じゃないか!

というか、大体何でこんなにも突き放されているというのに一緒に居ようとするのか。

もしかして、突き放されているって気付いてないのか…?

…この人ならあり得そうだ。

あまりにも落ち込む姿の志織さんが可哀想だったので、家まで送っ

てあげることにした。

どこか明後日の方向を見つめる志織さんはいつもの志織さんではなかった。

毎日こんな風に相手に相手にされているにも拘わらず、次の日の朝には元気になっている。

寝たら全てが有耶無耶になるプラス思考な性格なのか？

それとも、元気な様子を装っているのか…？

「志織さん」

「んー…何よ」

考えすぎなのかもしれないな。

とりあえず、今の内に訊いておいた方がいいのは…

「どうしてそこまでして妹と帰りたいたいんですか？」

これは先ず訊いておかないと。

「どうして、ねえ」

というか、突き放されていることに気づいているのか？

「…一緒に帰らないといけないのよ」

「帰らないといけない…？」

何で『いけない』んだ？

この場合は have to じゃなくて must に当てはまるんじゃないか。

「……」

「あの一、何でそんな義務的なんですか？」

「…っ」

明後日の方向を向いていた視線が僕の目線に重なる。

そこにはさすがな表情の志織さんがいた。

前からは想像できない、何もかも自信が無い顔だ。

「ど…どうしたんですか」

「小宮山…」

志織さんの様子がおかしい。

僕の手を掴んできた。

その手は恐ろしく震えており、目線は相変わらず僕を捉えていた。

「志織さん、大丈夫ですか？」

そんなことしか訊けなかった。僕からしたら一体何が起きているのか分からない。

急に表情が変わり、いつもの志織さんじゃなくなってしまうている。

「あ…あ、…」

震えは止まらない。

どうしたらいいんだ、こんな時。どんな言葉をかければいいんだ？

僕は今、この人に頼りにされているというのか…？

「志織さん…」

僕はここで『大丈夫ですよ』と言っているのか。

理由も無い根拠も無い、それなのに大丈夫と確信をもって言えるだろうか。

いや、言えない。

志織さんに一体何があったのかを把握してからで無いと駄目だ。

そんな気休めな言葉は言えない。

僕は、ぎゅっと志織さんの小さい手を握り返すことしか出来なかった。

「どうした！ 明人！」

僕が志織さんの対応に右往左往していると、背後から聴き覚えのある声があった。

志織さんの手が僕よりも強い力で握り返す。いきなりの声で驚いたのだろう。

「あ、孝介！」

孝介だった。

いつもと違う志織さんの顔を見て、流石に戸惑っているように見える。

「何があった？」

「それが僕にも…」

「こいつは俺が送ってきてやる」

ん？そもそも何で孝介がここに。

僕たちは学校からはまだそう遠くない道にいた。

「僕も…！」

何でここで僕が引き下がらないといけないんだ。

志織さんが僕を頼りにしてくれているのかもしれないのに。

「明人、お前最近、傘部に来てないだろ？」

「あっ…」

ということとは孝介は、今日も早々に帰ってしまう僕を呼びとめに来たのか。

…すっかり周りが見えていなかった。

そういえば、この二日間は傘部に寄らないまま志織さんの所へ行っ
てたんだっけ。

「行って来い。変にみんな心配してるぞ」

「分かった。孝介ありがとう」

今は孝介に頼むしかない。

明日になれば気分が戻っていると信じよう。

僕に出来ることなんてそれくらいだ。

「篠原…離しなさいよ…」

「んなこと出来るわけないだろ」

お前を離すと何を仕出かすか解らないからな。

「離してよっ！」

人気のない道端で叫ばれる。

誰かに勘違いで通報されたら傑作ものだぞ。

「もう嫌なのよ…こんなこと…」

嫌だろうな。

妹に何をしても振り向いてもらえないお前は見ていて残酷に思える。

「だからって明人に秘密を話そうってか？」

「嫌なの…！」

そんなこと許せると思っっているのかこいつは。

「約束は守れ」

「そんなのもういつの話よ!？」

いつか。なんて聞かれたら5年前かもしれないし、10年前かもしれないし。もしかしたら未来なのかもしれない。

「知らないな。しかしお前は約束は忘れていない。勿論、俺もだ」

「じゃあいつまで守ればいいのかよ!」

「終わるまでだ」

事が終わるまでだ。

それまでお前は約束を守り続けなければいけない。

「じゃあ早く終わらせてよ!」

早く終わらせろ？

よく俺のことも解らず言い切れたものだな。

まあ誰も解りはしないか。たとえそれが翔平であっても一輝であつても。

「お前、何か勘違いしてないか？」

「…何が!？」

やっぱりそうか。

こいつは今の自分の立場を分かってないようだ。
なら言っつてやろう。

「お前は俺にとってイレギュラーな存在なんだよ」

分かったのだろうか、納得したのだろうか。

それは顔を見れば判断出来た。

「この世界が好きなのは知らないが、お前は元々入っていないんだよ」

お前はこの世界においてはキャラクターなんだ。いなくなればみんなの中からいなくなる。ここはそういう世界。

「でも…でもお…志恩から愛されたいのお…!!」

今度は嗚咽が道端に響く。

本当に通報されるぞ。

全くもって傑作だな。

「…愛されたら分かっているのか？」

お前がこの世界にやってきた理由。

それは『妹に愛されたい』という願望のためだ。

その願望が果たさればどうなるのか。

それは一番お前が分かっているだろ。

俺の気持ちくらい解ってくれよ。

届かない気持ち（後書き）

「以下のところはまだ」は？「くらいに思っ
てくれて大丈夫です。」

一応複線のつもりですが、それはこの物語が終わってからの話で
すので、また全て見終えてからこのシーンを振り返るくらいで問題
ないです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8322p/>

親友な僕ら

2011年8月24日03時31分発行